

京都外国語大学 2016 年度卒業生対象 卒業時アンケート集計結果

2017/07/05

総合企画室 IR グループ

1. 調査の概要

■ 調査対象

2016 年度秋学期の卒業生全員

■ 調査期間と方法

2016 年度の卒業式の当日にマークシート式の調査票を配布し、その場で回答してもらった

■ 主な調査項目

- 校風や教育方針が合っていたか
- 学修や大学生活等への満足度
- 身についた能力
- 大学での成長実感や達成感
- 学生生活で入れて取り組んだこと
- 成長のきっかけとなったこと
- 卒業後の進路について

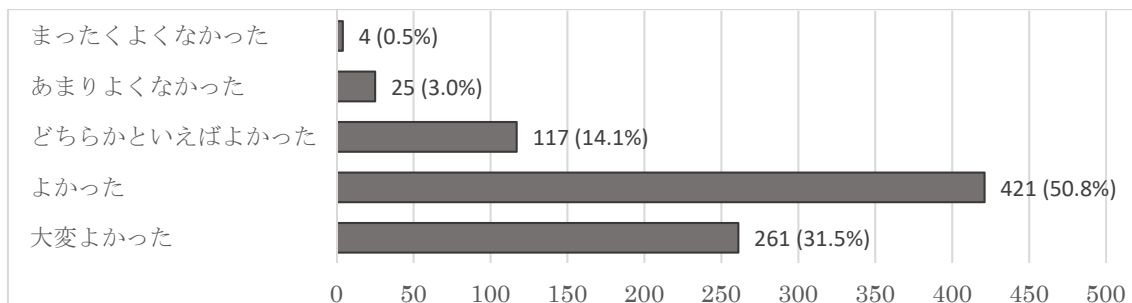
■ 回収状況

【表 1】 回答者数と回収率

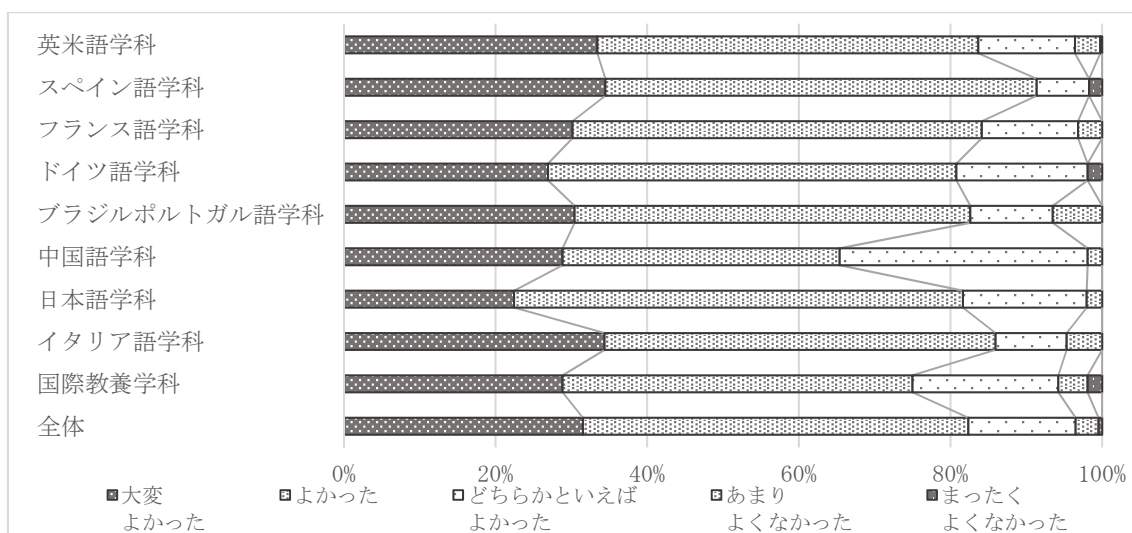
学科	男性	女性	不明	合計	回収率
英米語学科	128	266	0	394	88.3%
スペイン語学科	22	38	0	60	95.2%
フランス語学科	13	50	0	63	91.3%
ドイツ語学科	17	35	0	52	94.5%
ブラジルポルトガル語学科	26	20	0	46	95.8%
中国語学科	22	30	0	52	85.2%
日本語学科	18	30	1	49	87.5%
イタリア語学科	25	39	0	64	97.0%
国際教養学科	13	38	1	52	88.1%
合計	284	546	2	832	90.1%

2. 本学に入学してよかったか

大学生活を終えるにあたり、本学に入学してよかったかどうかをたずねた。全体では、「よかった」「大変よかった」を合わせた回答が 8 割を超えており、入学したことを肯定的に捉えている（図 1）。学科ごとにみても、それほど大きな差はないようである（図 2）。



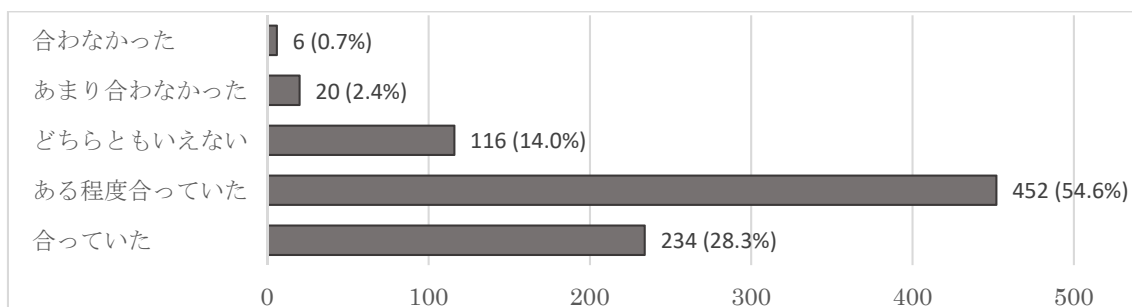
【図 1】 本学に入学してよかったか



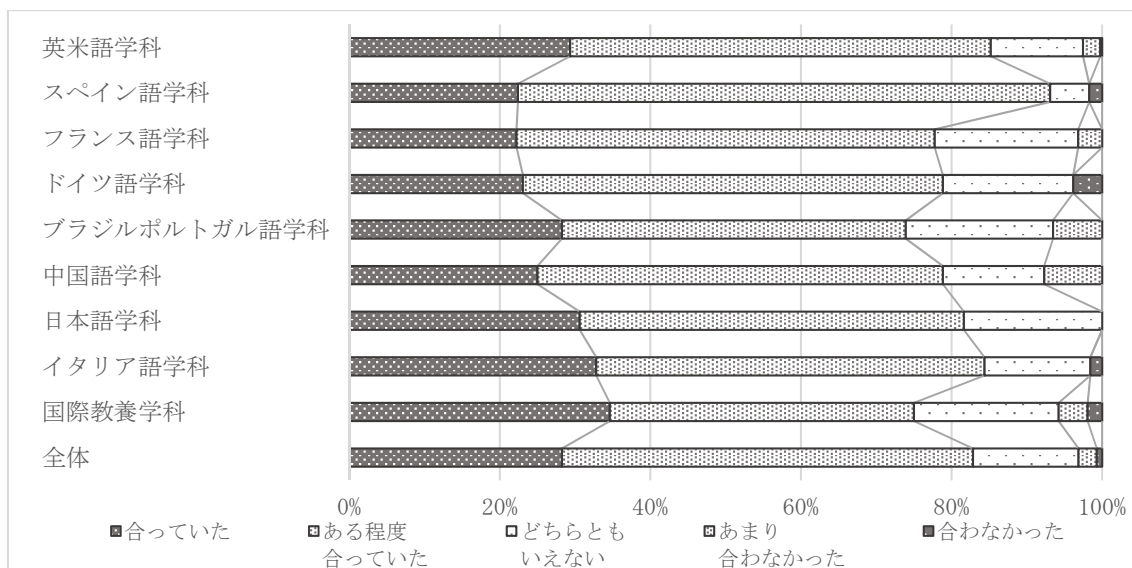
【図 2】 本学に入学してよかったか（学科別）

3. 校風や教育方針が合っていたか

本学の校風や教育方針が自分と合っていたかどうかをたずねたところ、多くの学生が「ある程度合っていた」と回答している。また、「合っていた」という回答も比較的多い（図 3）。学科ごとにみると、回答の分布に若干の差がみられるようである（図 4）。



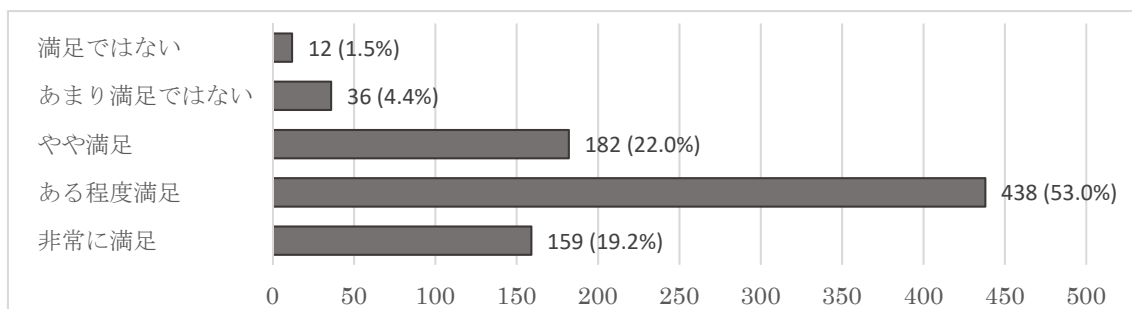
【図 3】 本学の校風や教育方針が自分に合っていたか



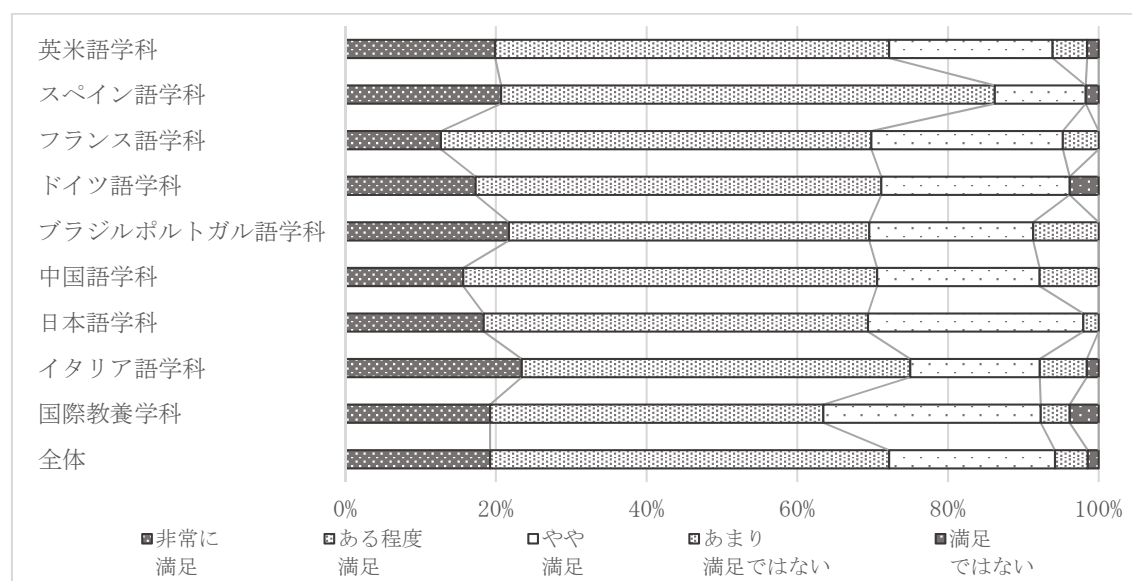
【図4】 本学の校風や教育方針が自分に合っていたか（学科別）

4. 大学生活における満足

学修に対する満足度をたずねると、多くの学生が満足していることがわかる（図5）。学科別で満足度を比較しても、一部に差はみられるが全体としては顕著な差はみられない（図6）。

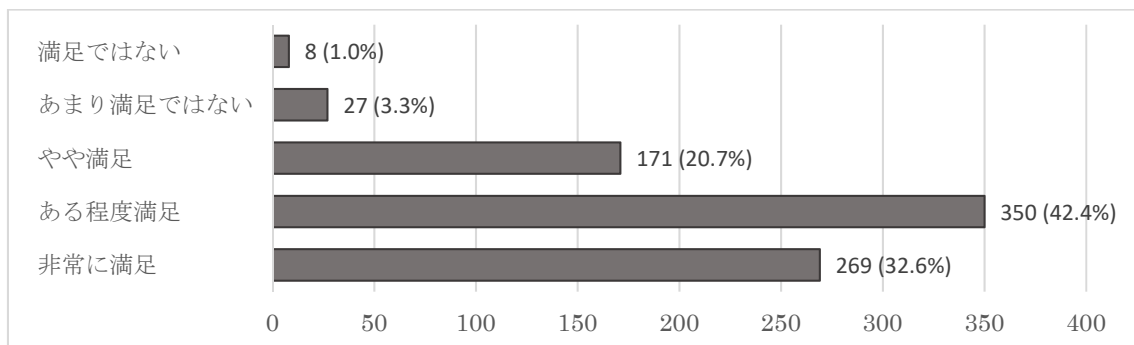


【図5】 学修に対する満足度

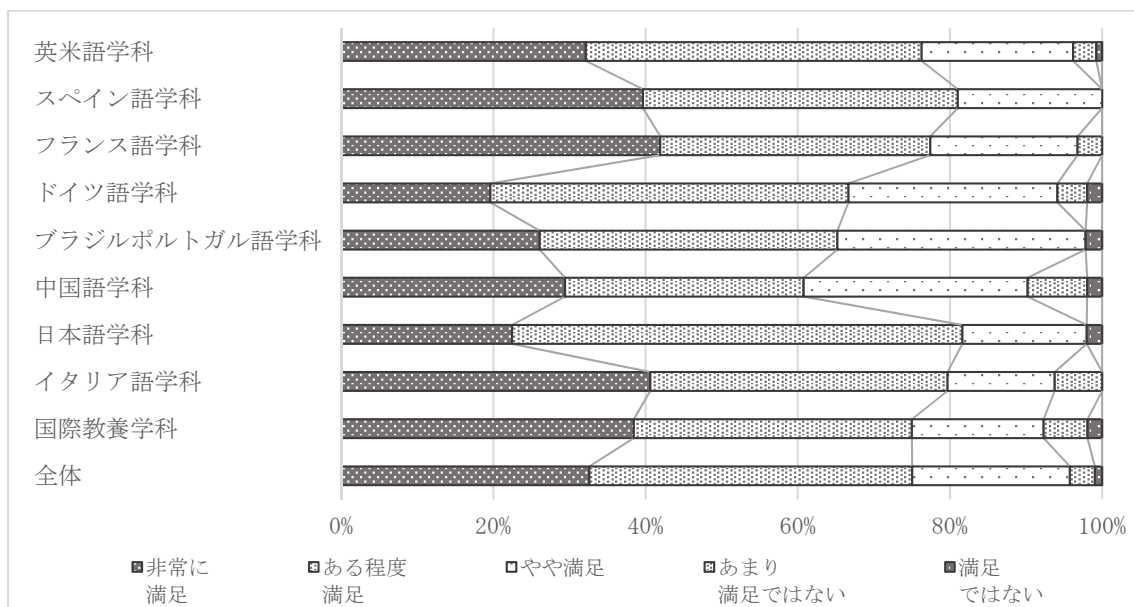


【図6】 学修に対する満足度（学科別）

次に、学修だけではなく大学生活全般に対する満足度をたずねたところ、ここでも総じて満足感が高いことがわかる（図7）。学科ごとにみると、統計的に有意な差とはいえないが、他の項目よりも満足度に差がみられるようである（図8）。



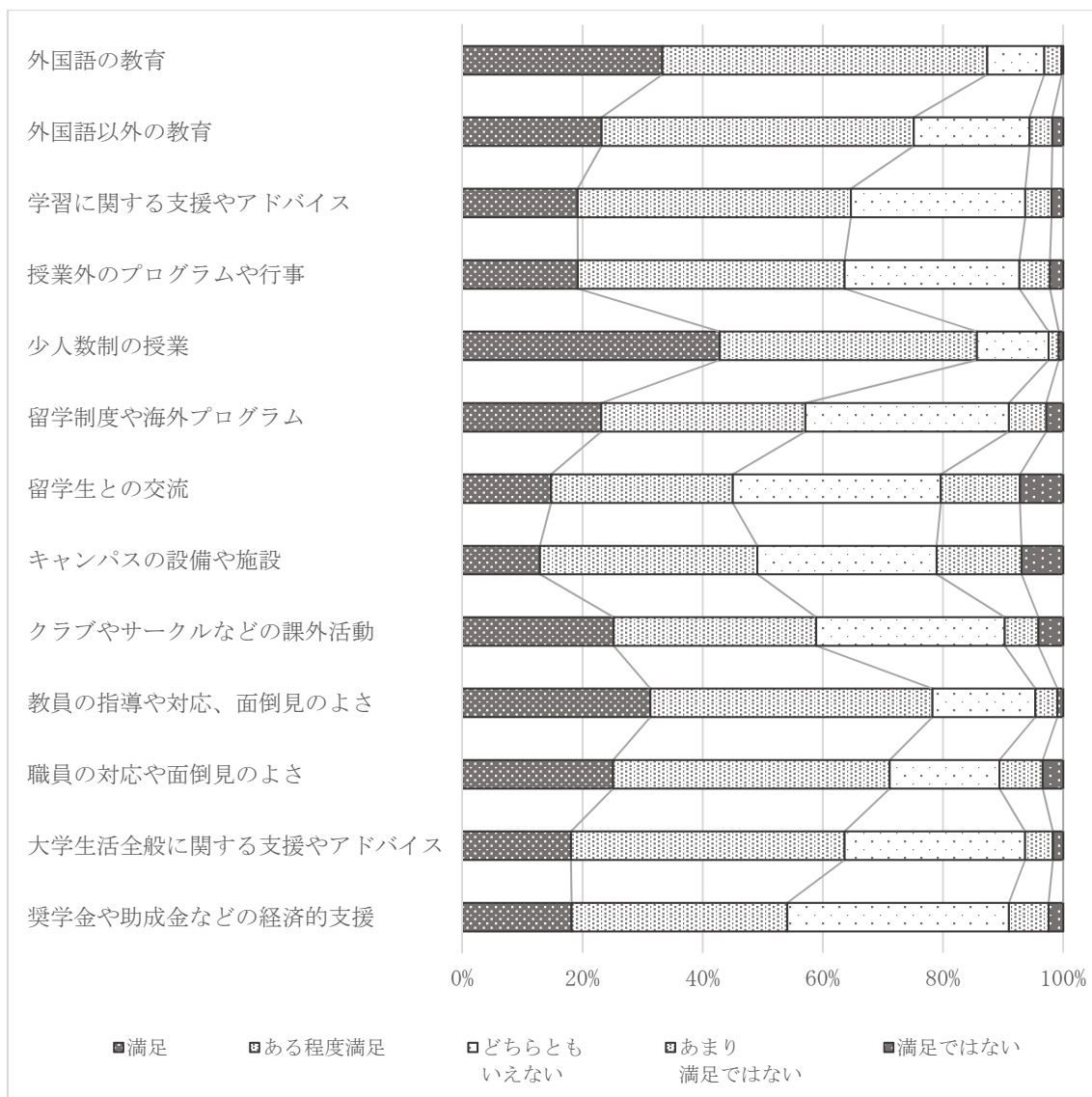
【図7】 大学生活全般に対する満足度



【図8】 大学生活全般に対する満足度（学科別）

個別の項目の満足度をたずねると、満足している人の割合が最も多いのが「外国語の教育」となっている。外国語大学の教育の柱である外国語教育に対する満足感が高いことは、好ましい結果であるといえる。その他に満足している人の割合が高い項目として、「少人数制の授業」や「教員の指導や面倒見のよさ」がある。これらは本学の教育の特色として打ち出している点であり、こうした教育に卒業生が満足していることがうかがえる。他方で、「留学制度や海外プログラム」「留学生との交流」など、外国語大学の教育において重要だと考えられる点についての満足感が相対的に低い点は留意すべき点だろう（図9）。

各項目の満足について学科ごとにみると、分布に有意な差がみられる項目として「外国語の教育」「授業外のプログラムや行事」「少人数制の授業」「留学制度や海外プログラム」「留学生との交流」がある（表2）。差がみられる項目について学科ごとに集計すると、さほど大きな差ではないが満足度の違いがみられるようである（図10・図11・図12・図13・図14）。これらの違いは、学科ごとの教育内容や取り組みの特色によるものだと考えられる。これらの満足度の違いが、学科の取り組み内容と一致しているかどうかを検討する必要がある。だろう。

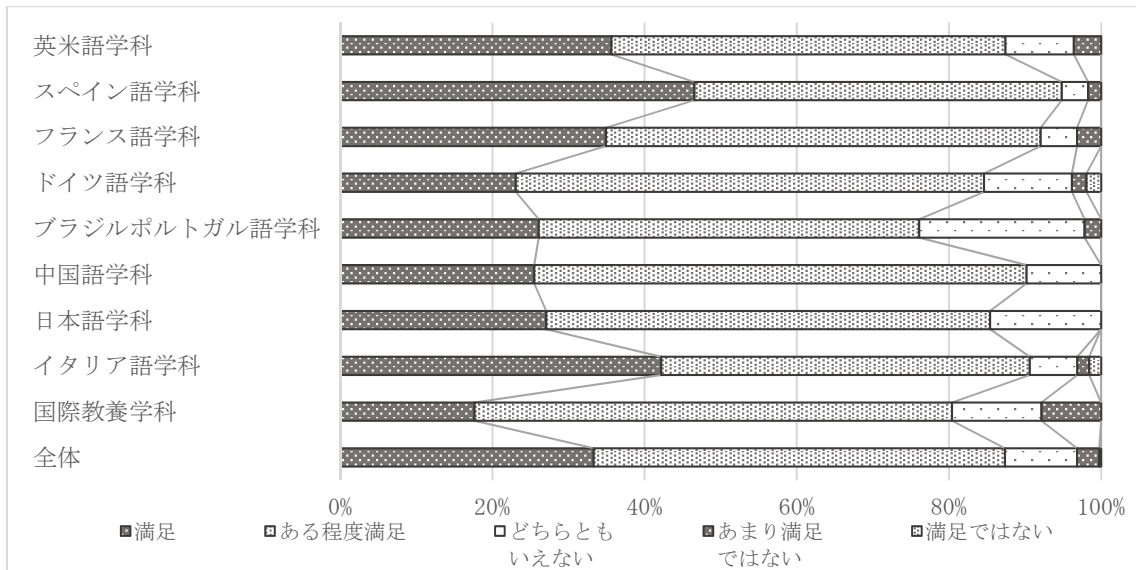


【図 9】 大学に対する満足

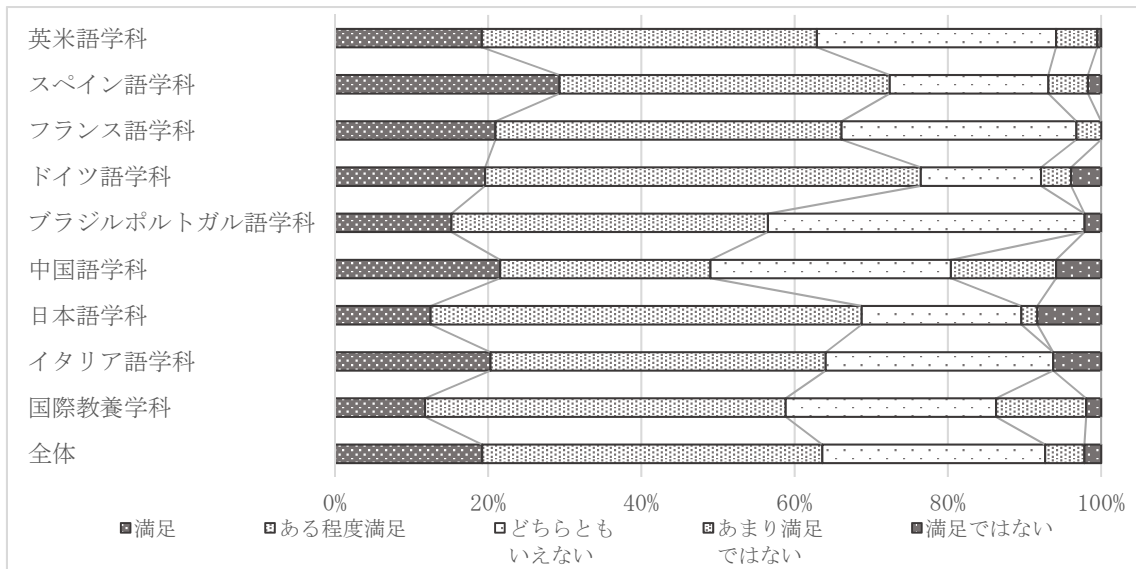
【表 2】 学科と大学に対する満足の関係

	Cramer's V
外国語の教育	0.125**
外国語以外の教育	0.101
学習に関する支援やアドバイス	0.105
授業外のプログラムや行事	0.140***
少人数制の授業	0.131***
留学制度や海外プログラム	0.136***
留学生との交流	0.134***
キャンパスの設備や施設	0.084
クラブやサークルなどの課外活動	0.090
教員の指導や対応、面倒見のよさ	0.112
職員の対応や面倒見のよさ	0.103
大学生活全般に関する支援やアドバイス	0.088
奨学金や助成金などの経済的支援	0.101

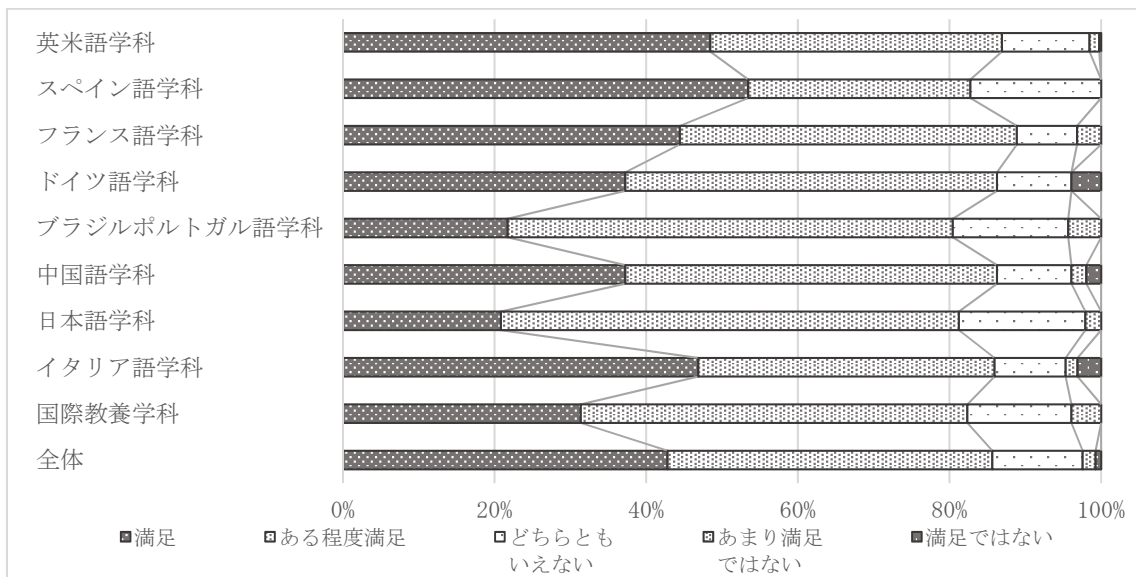
※p<0.01:***, p<0.05:**, p<0.10:*



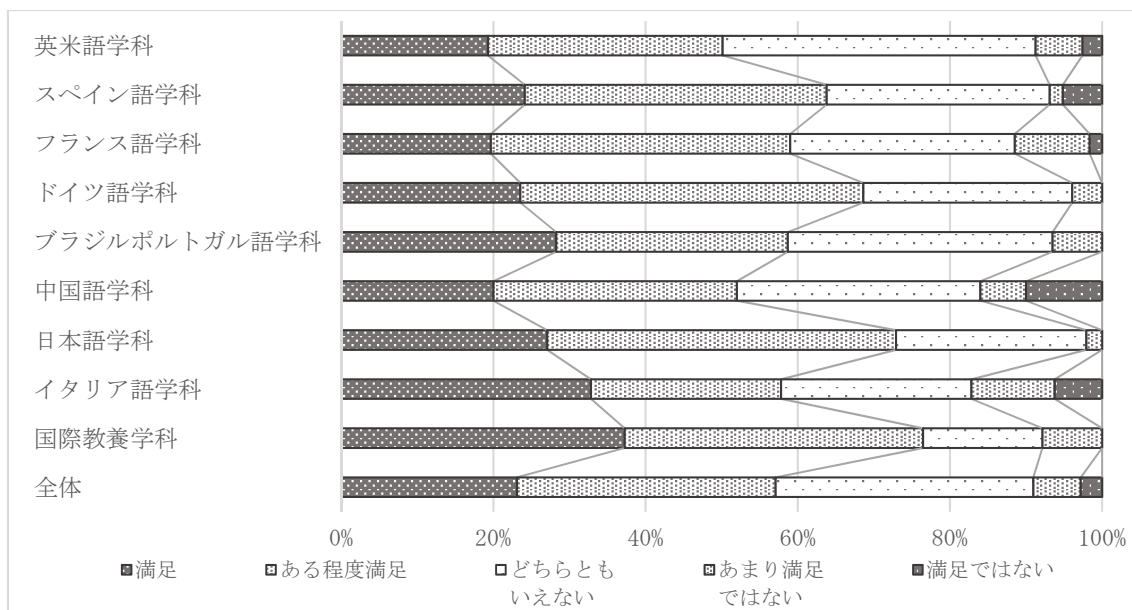
【図 10】 学科ごとの「外国語の教育」の満足



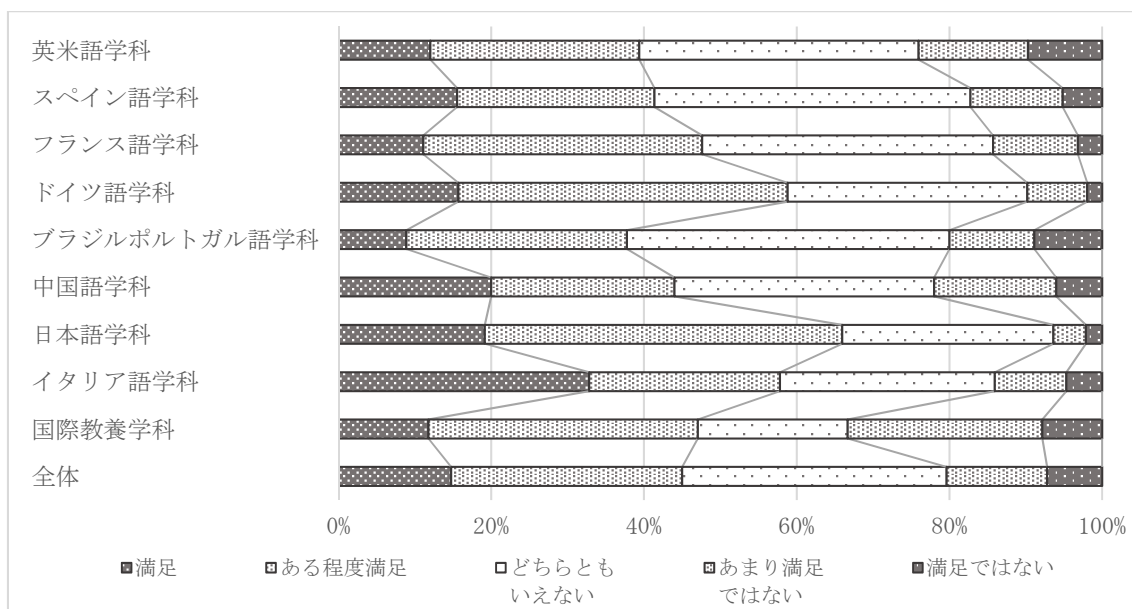
【図 11】 学科ごとの「語劇祭などの授業外プログラム」の満足



【図 12】 学科ごとの「少人数制の授業」の満足



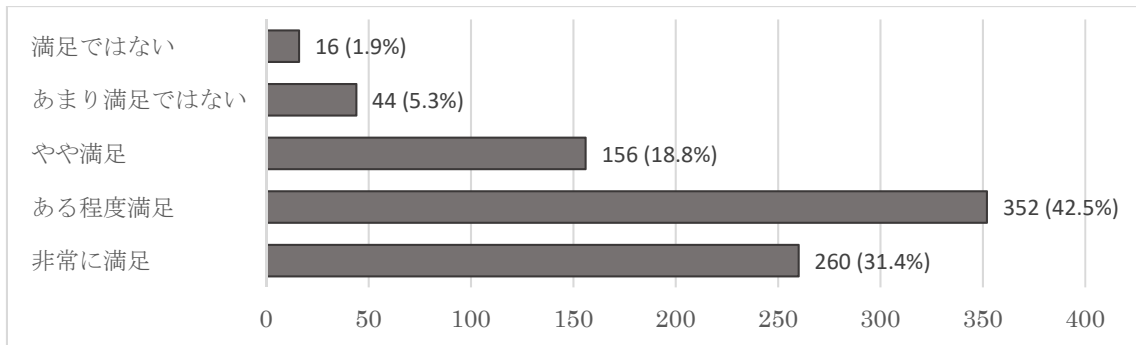
【図 13】 学科ごとの「留学制度や海外プログラム」の満足



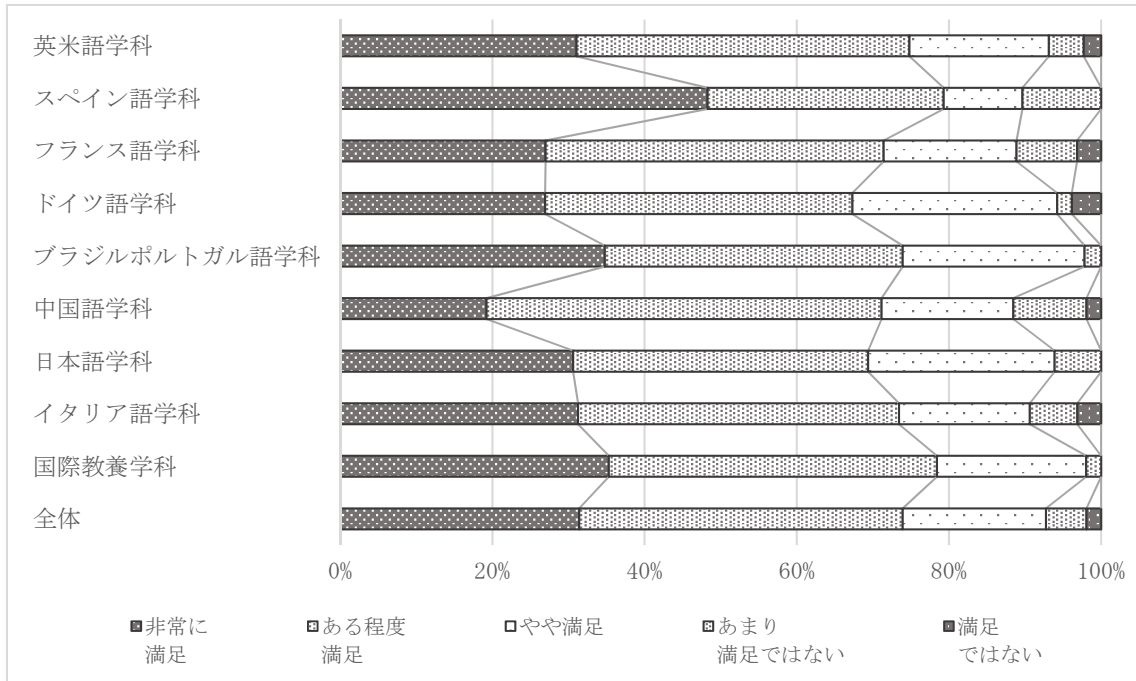
【図 14】 学科ごとの「留学生との交流」の満足

5. 卒業後の進路について

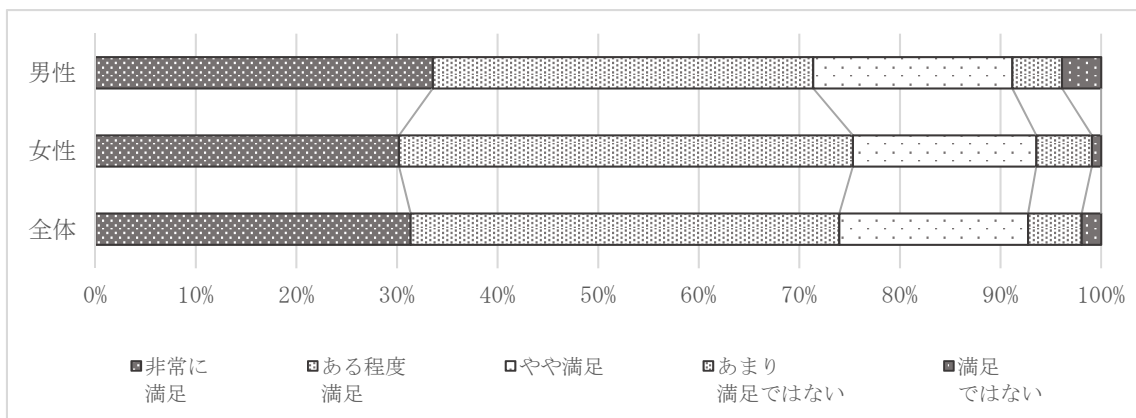
卒業後に予定している進路についての満足度をたずねると、多くの学生が「満足」だと回答している（図 15）。学科別にみると、一部に非常に満足している学生の割合が多い学科があるようである（図 16）。性別では満足度に大きな差はみられない（図 17）。進路を決めるプロセスに対する納得感をたずねると、全体としては「納得している」という回答が多い（図 18）。学科別、性別では、納得感に大きな差はみられないようである（図 19・図 20）。



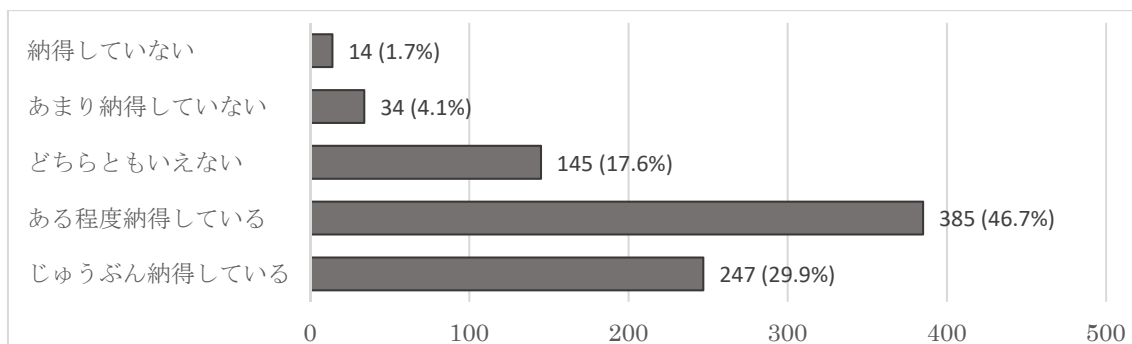
【図 15】卒業後の進路に対する満足度



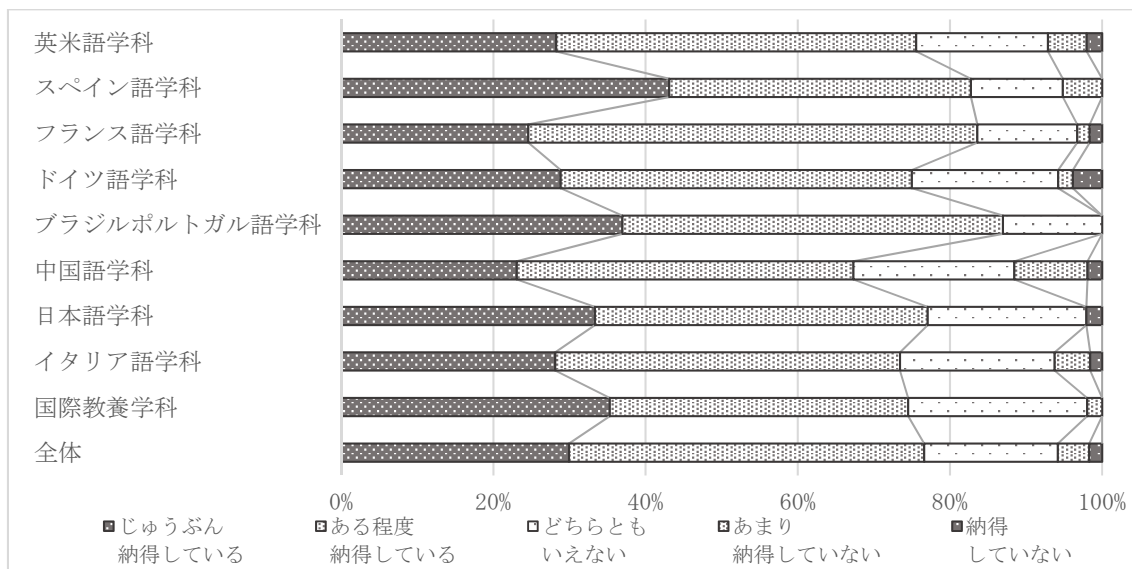
【図 16】卒業後の進路に対する満足度（学科別）



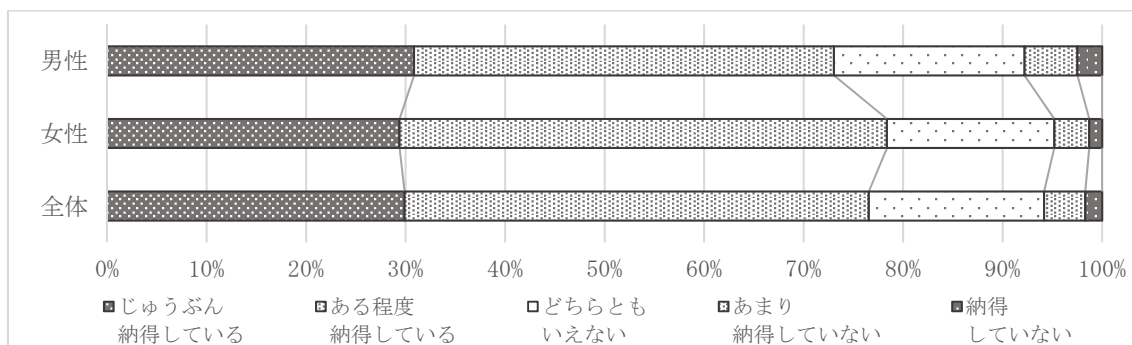
【図 17】卒業後の進路に対する満足度（性別）



【図 18】就職活動や進路を決めるプロセスはどれくらい納得できるものだったか



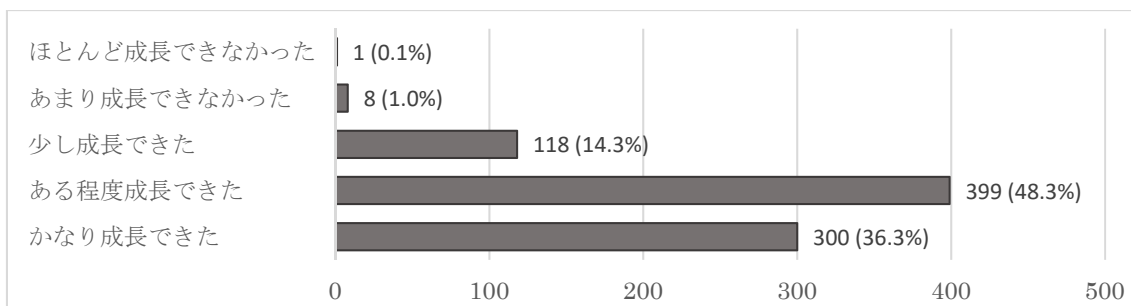
【図 19】就職活動や進路を決めるプロセスはどれくらい納得できるものだったか（学科別）



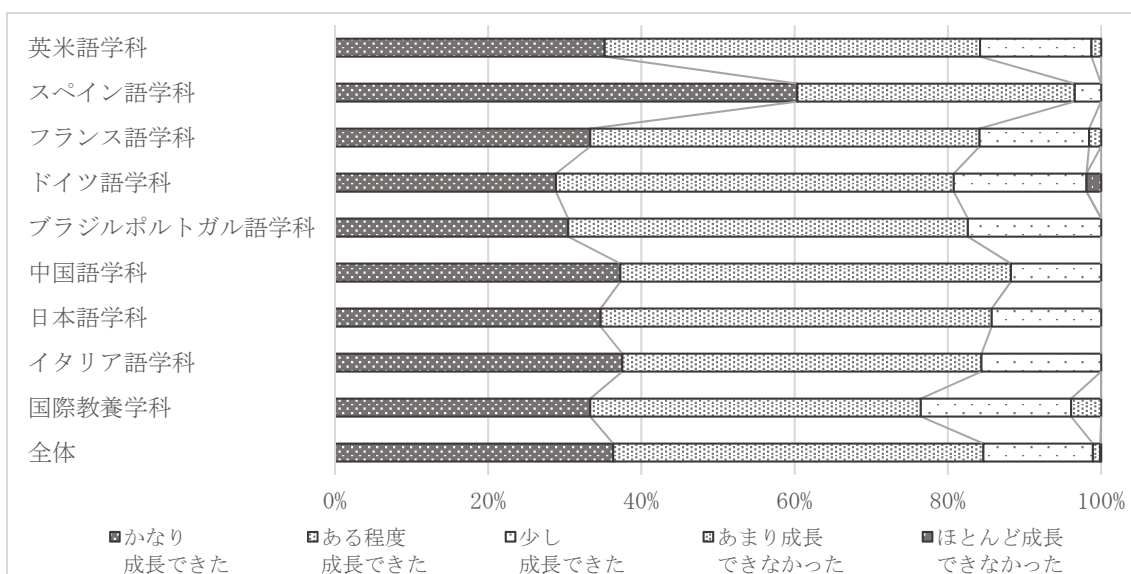
【図 20】就職活動や進路を決めるプロセスはどれくらい納得できるものだったか（性別）

6. 成長の実感

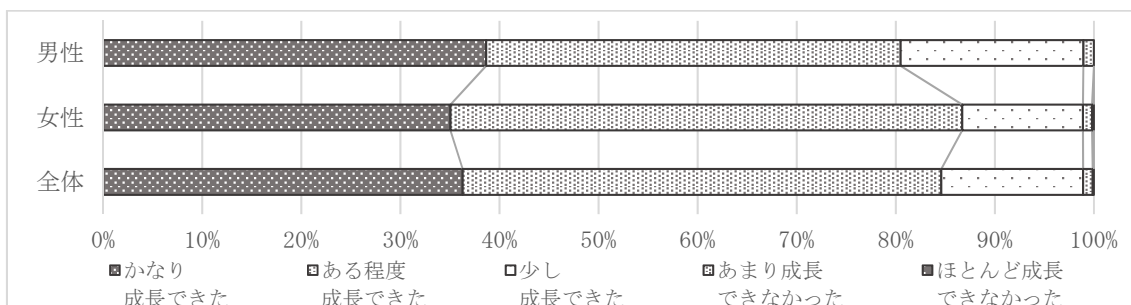
大学生活において自分がどれくらい成長できたかをたずねたところ、多くの学生がある程度の成長を実感していることがわかる（図 21）。成長実感度を学科別にみると、スペイン語学科の学生は他の学科と比較して相対的に強く成長を実感している人の割合が多いようである（図 22）。



【図 21】 大学生生活でどのくらい成長できたか



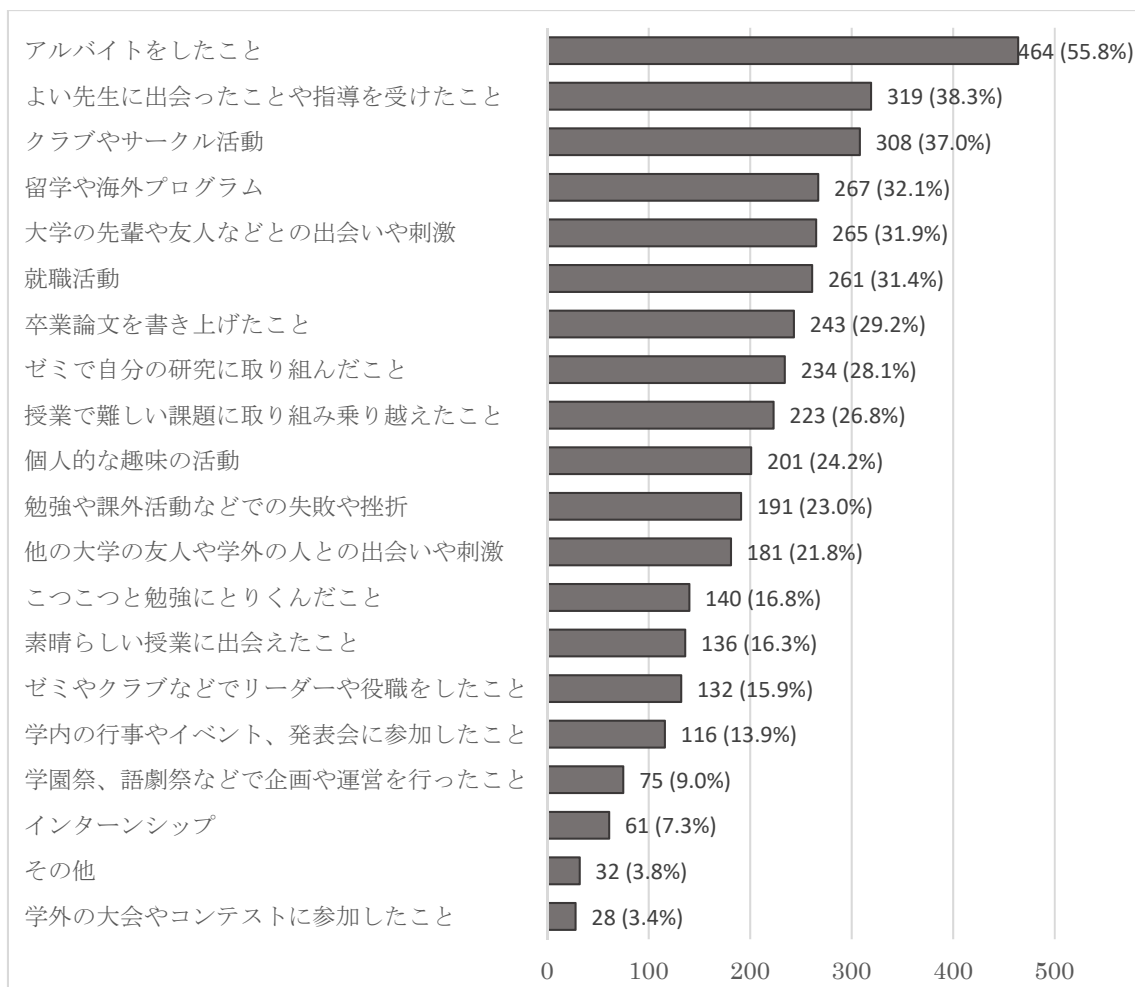
【図 22】 大学生生活でどのくらい成長できたか（学科別）



【図 23】 大学生生活でどのくらい成長できたか（性別）

成長のきっかけをたずねると、「アルバイト」の言及が最も多い。実践的な社会経験は、大学での学びよりも直接的な成長の手ごたえが感じられやすいのだろう。次に言及が多いのは、「よい先生に出会ったことや指導を受けたこと」である（図 24）。卒業生がよい先生と出会ったことや指導が成長のきっかけとなっていると感じていることは、それぞれの教員が丁寧に教育活動に取り組んできた成果だといえるだろう。

成長のきっかけの各項目への言及を学科ごとに集計して有意な差がみられるのは、「授業で難しい課題に取り組み乗り越えたこと」「学園祭、語劇祭などで企画や運営を行ったこと」「個人的な趣味の活動」「就職活動」「ゼミやクラブなどでリーダーや役職をしたこと」である（表 3）。学科によって成長のきっかけが異なることは、学科の教育内容や学生の特徴の違いを示していると考えられる（図 25・図 26・図 27・図 28・図 29）。

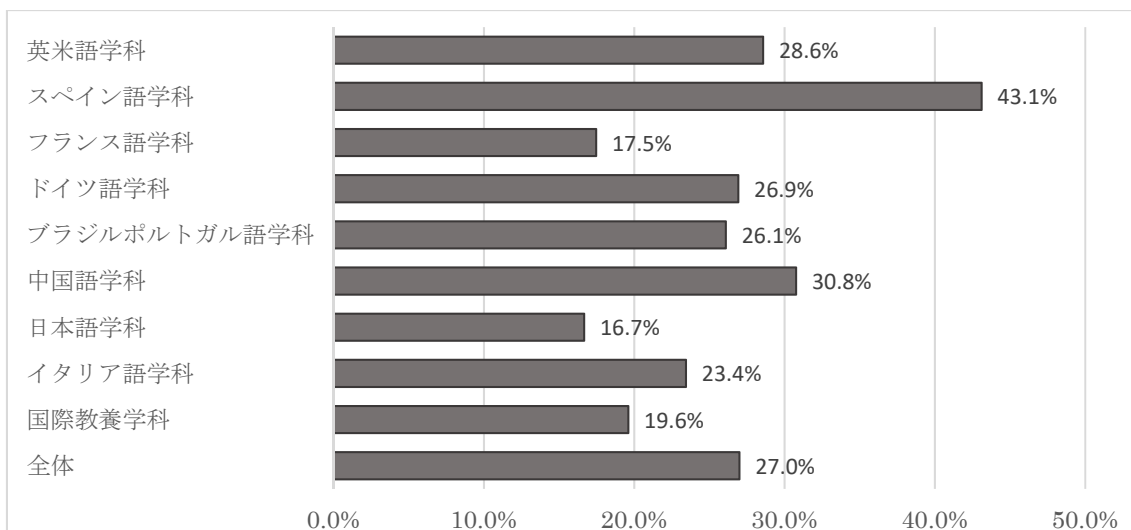


【図 24】 成長のきっかけになったこと

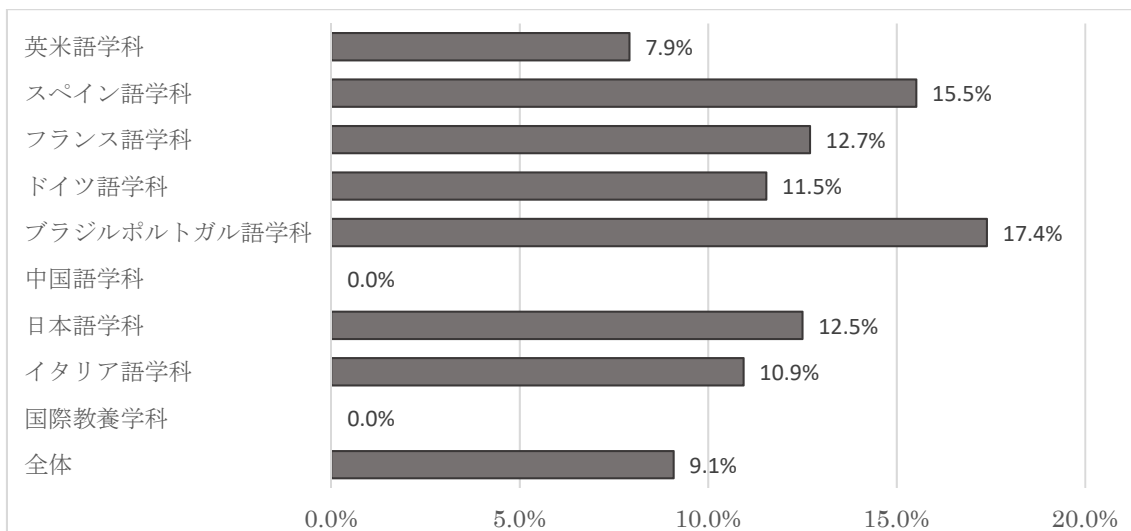
【表 3】 学科と成長のきっかけになったことの関係

	Cramer's V
授業で難しい課題に取り組み乗り越えたこと	0.139**
勉強や課外活動などでの失敗や挫折	0.085
ゼミで自分の研究に取り組んだこと	0.083
こつこつと勉強にとりくんだこと	0.124
学内の行事やイベント、発表会に参加したこと	0.126
クラブやサークル活動	0.079
学園祭、語劇祭などで企画や運営を行ったこと	0.156**
個人的な趣味の活動	0.157***
就職活動	0.137**
インターンシップ	0.116
素晴らしい授業に出会えたこと	0.072
よい先生に出会ったことや指導を受けたこと	0.083
卒業論文を書き上げたこと	0.109
他の大学の友人や学外の人との出会いや刺激	0.094
学外の大会やコンテストに参加したこと	0.103
ゼミやクラブなどでリーダーや役職をしたこと	0.142**
大学の先輩や友人などとの出会いや刺激	0.090
アルバイトをしたこと	0.079
留学や海外プログラム	0.113
その他	0.122

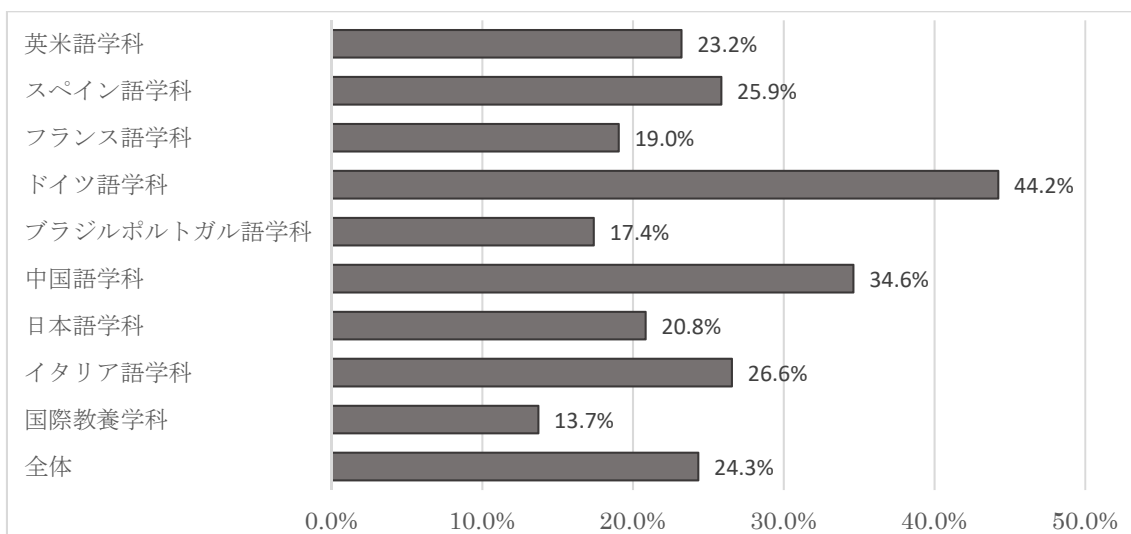
※p<0.01:***, p<0.05:**, p<0.10:*



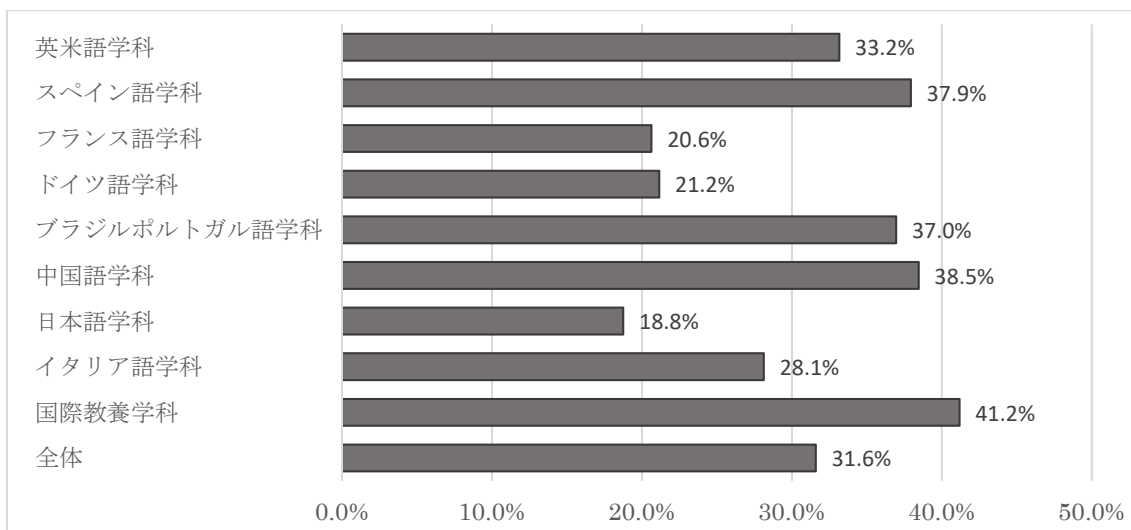
【図 25】 学科別の成長のきっかけ「授業で難しい課題に取り組み乗り越えたこと」



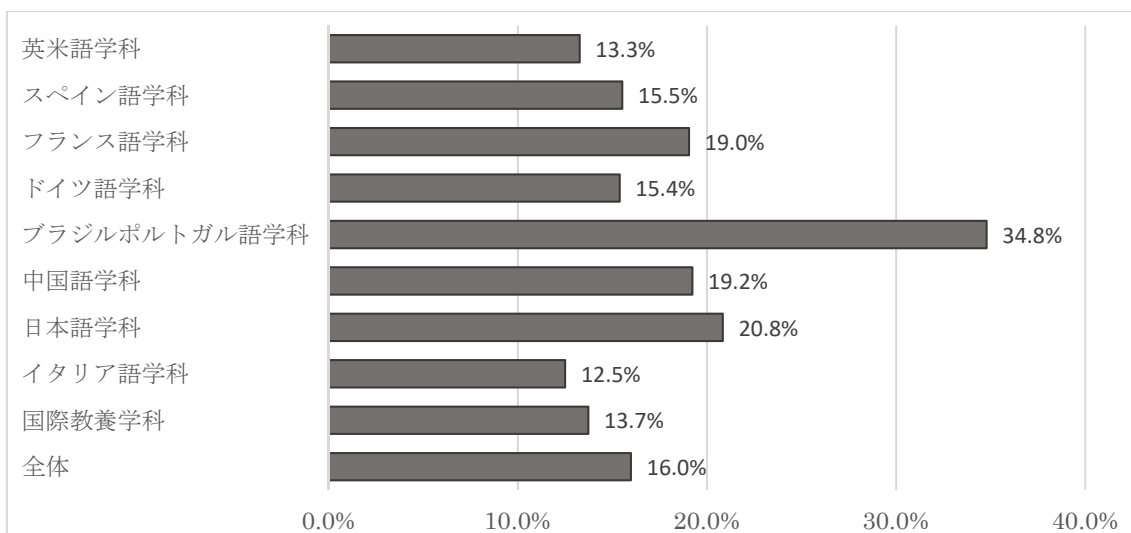
【図 26】 学科別の成長のきっかけ「学園祭、語劇祭などで企画や運営を行ったこと」



【図 27】 学科別の成長のきっかけ「個人的な趣味の活動」



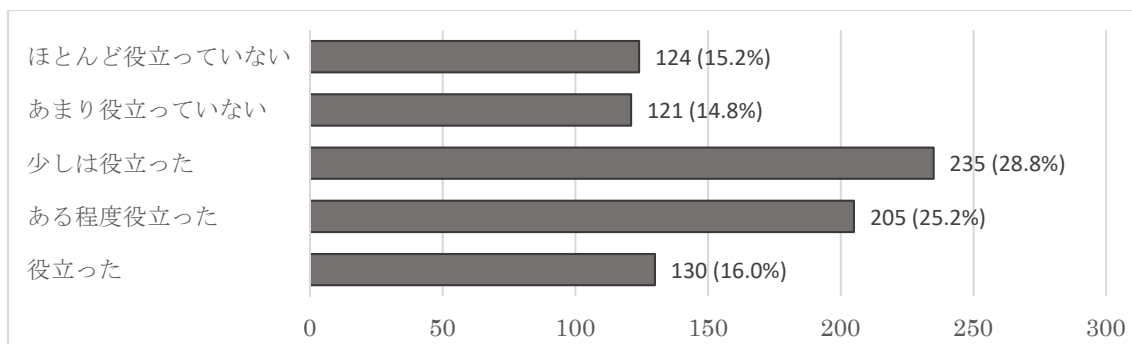
【図 28】 学科別の成長のきっかけ「就職活動」



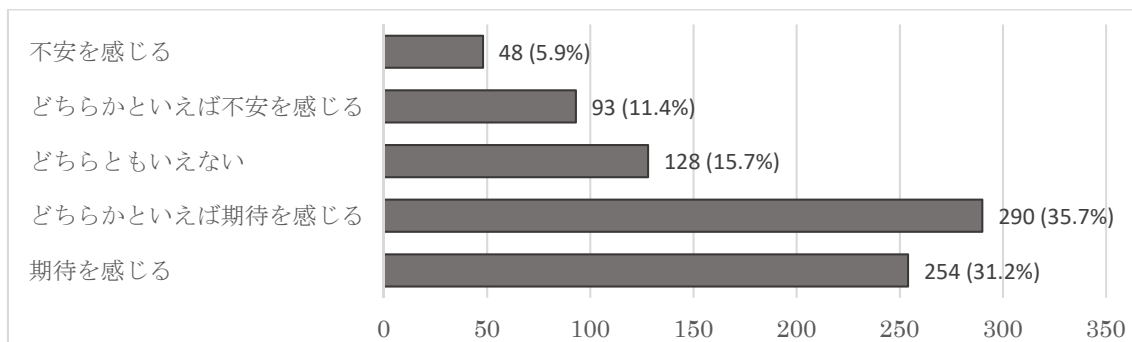
【図 29】 学科別の成長のきっかけ「ゼミやクラブ、サークルなどでリーダーや役職をしたこと」

進路決定において、キャリアセンターをはじめとした大学の支援やアドバイスが役立ったかどうかを 5 段階でたずねたところ、「ほとんど役立っていない」から「役立った」まで回答が広く分布する。全体としてみれば、何らかの形で役立ったという回答が多いものの、役立っていないという回答も一定数ある（図 30）。卒業生が「役立つ」をどのように考えているのかを踏み込んで検討することや、それに対応して支援のあり方を見直していくなど、引き続き取り組みを進める必要があるだろう。なお、学科間で分布の差はみられない。

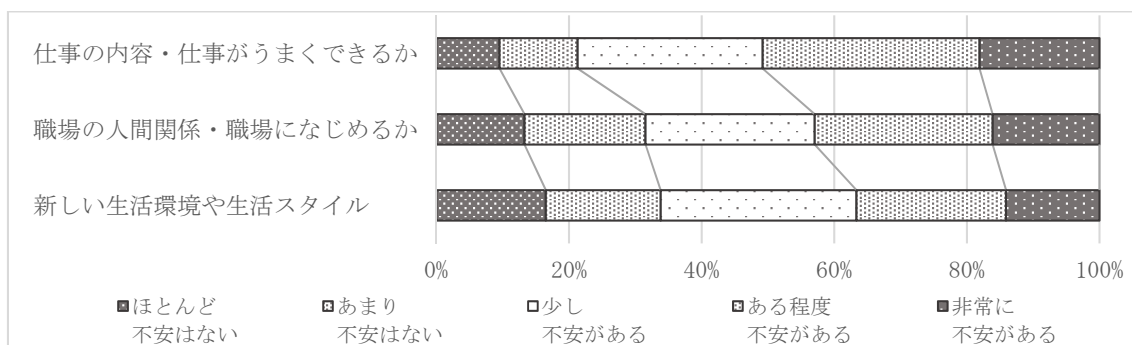
卒業後の進路に対する期待や不安をたずねると、全体としては不安がある人よりも期待を持っている人の方が多いようである（図 31）。卒業後に就職する人について、仕事の内容、職場の人間関係、新しい生活環境について不安があるかをたずねると、不安がある人が比較的多く、中でも仕事の内容に関する不安が強いようである（図 32）。全体としては卒業後の進路に期待を持ちつつ、仕事や新たな生活には不安感を持っていることがうかがえる。



【図 30】 進路決定に大学の支援は役立ったか



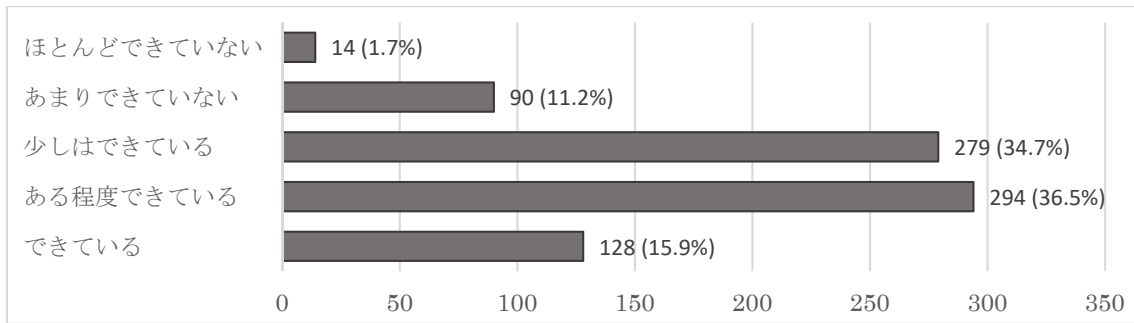
【図 31】 卒業後の進路に対する期待や不安



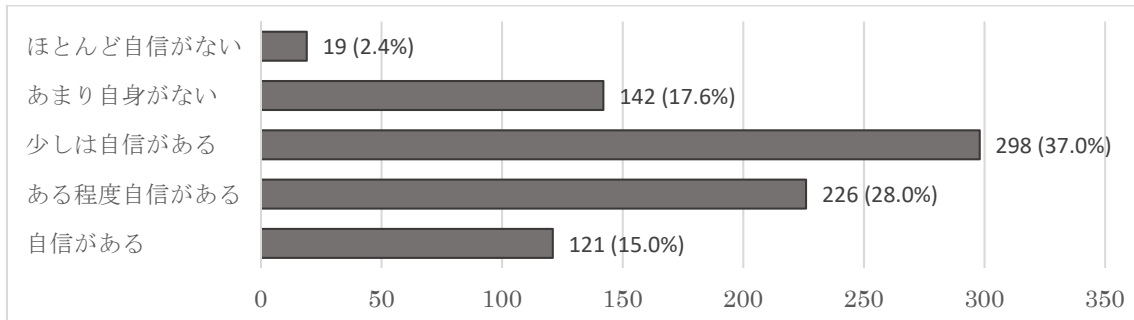
【図 32】 就職に関する不安（就職する人のみ）

卒業後の進路に対する準備状況として、社会人としての自覚など心の準備ができているかをたずねた。明確に準備ができているという回答はさほど多くはないが、全体としてみれば準備はできていると考えている人が多いようである（図 33）。同様の質問として、社会人としてやっていく自信についてもたずねた。全体では「ほとんど自身がない」という回答はわずかであるが、「あまり自身がない」という人は一定数おり、両者を合わせると約 2 割の人が社会人としてやっていく自信が持てないようである。こうした卒業生に対しては、何らかの支援が必要かもしれない（図 34）。

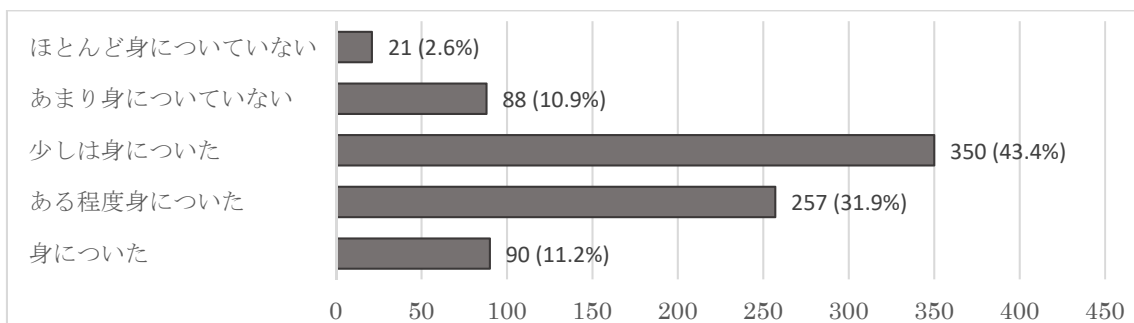
大学で卒業後の進路において必要な能力が身についたかどうかをたずねると、「少しは身についた」という回答が最も多く、続いて「ある程度身についた」も比較的多い（図 35）。このような大学で学んだことが社会で役立つと思うかをたずねると、全体として役立つと感る傾向があるが、大学の授業で学んだことが直接役立つというよりも、大学生活全般を通して学んだことが役立つだろうと考えていることがうかがえる（図 36・図 37）。



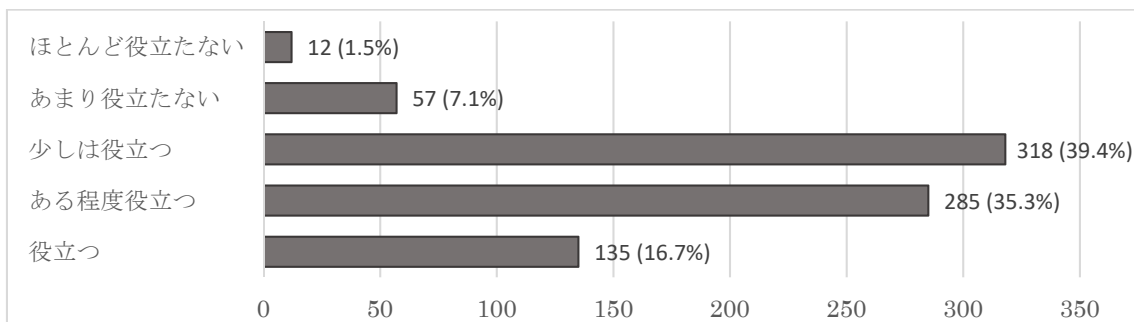
【図 33】卒業後の進路に向けた心の準備ができているか



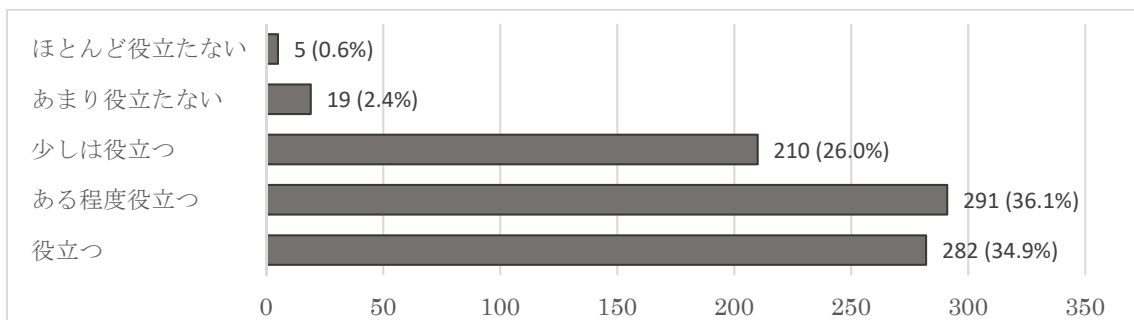
【図 34】社会人としてやっていく自信



【図 35】卒業後に必要な能力が大学で身についたか



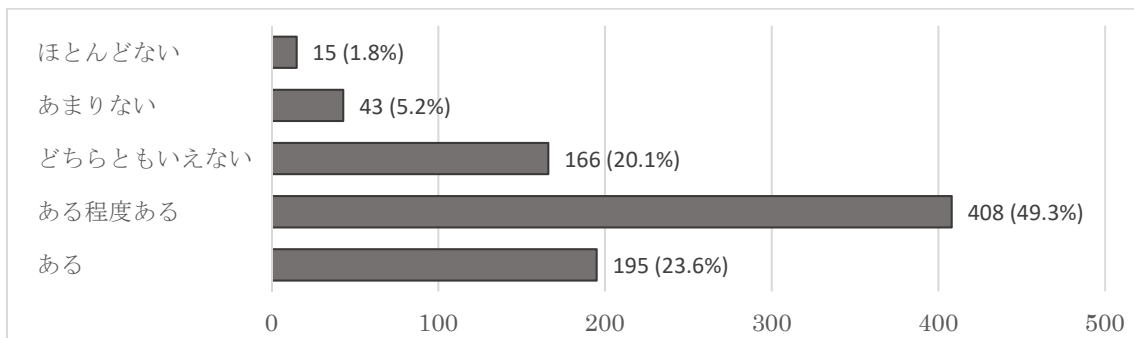
【図 36】大学の授業で学んだことは仕事や生活で役立つと思うか



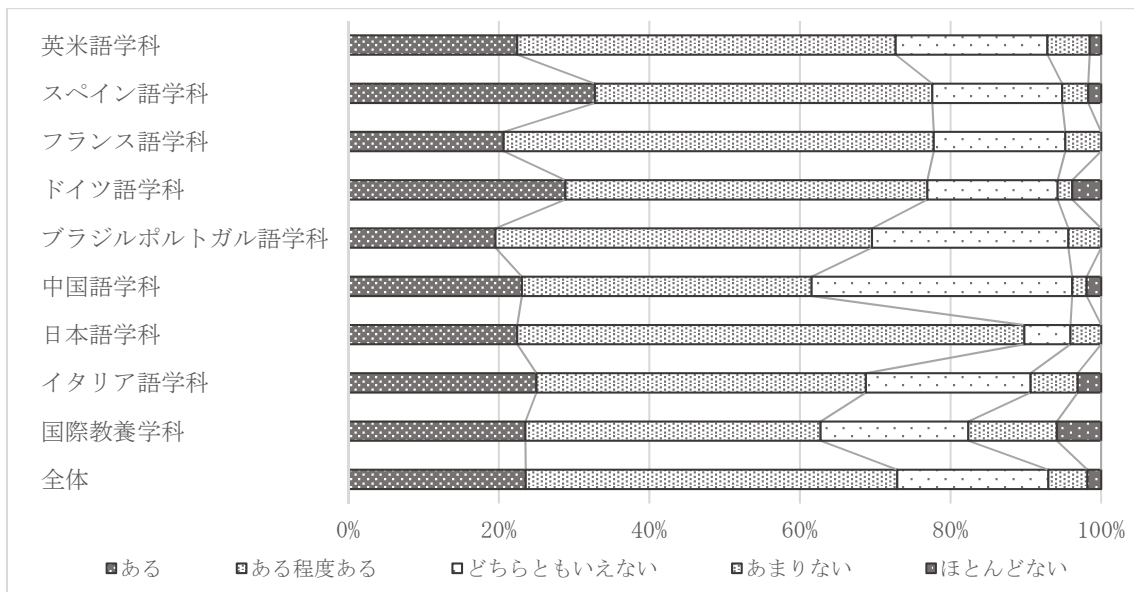
【図 37】大学生生活全般で身につけたことは仕事や生活で役立つと思うか

7. 大学生活における達成感

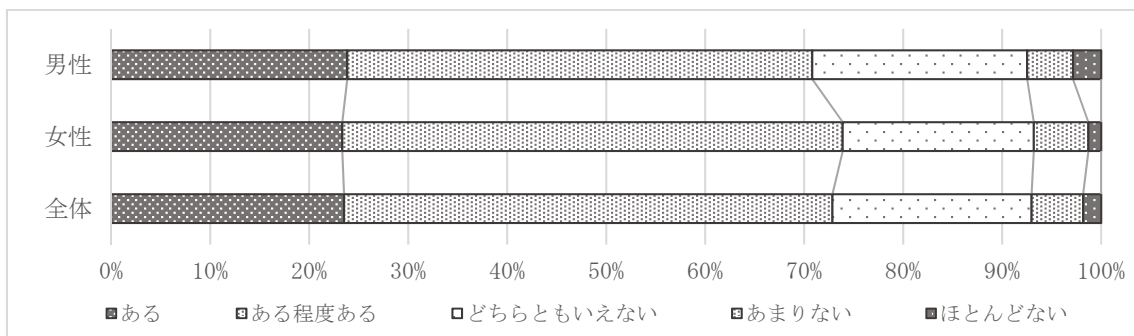
大学生活における勉学についての達成感と、勉学に限らず全般的な達成感についてたずねた。勉学についての達成感は「ある程度ある」との回答が半数近くを占めており、多くの学生がそれなりに達成感を感じていることがうかがえる（図 38）。学科別にみると、日本語学科で達成感を感じている人の割合がやや高いように見えるが、全体としては大きな差はみられない（図 39）。また、性別でも差はみられない（図 40）。勉学に限らず総合的な達成感をみると、勉学よりも達成感をより強く感じている人の割合が多いことがうかがえる（図 41）。総合的な達成感についても、学科や性別で差はみられない（図 42・図 43）。



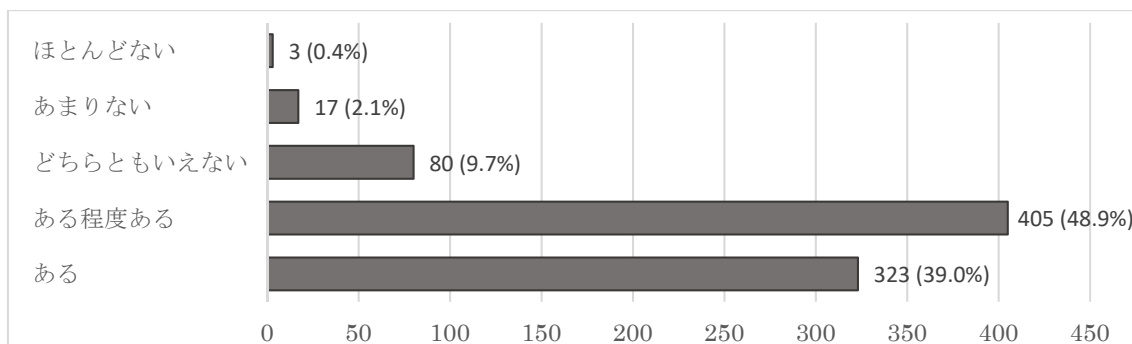
【図 38】 大学生活での勉学についての達成感



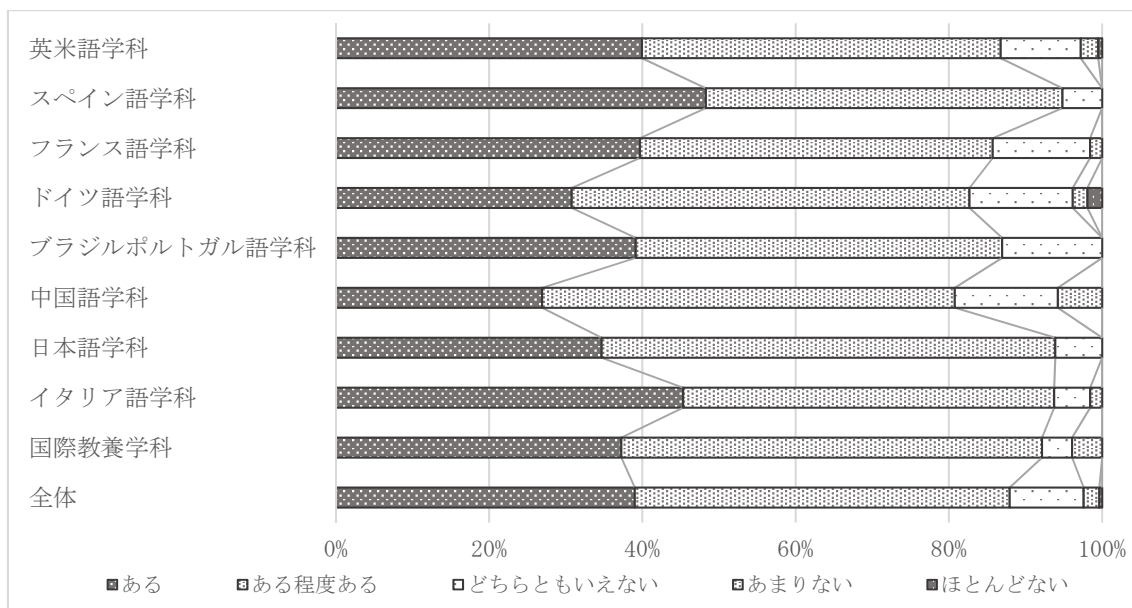
【図 39】 大学生活での勉学についての達成感（学科別）



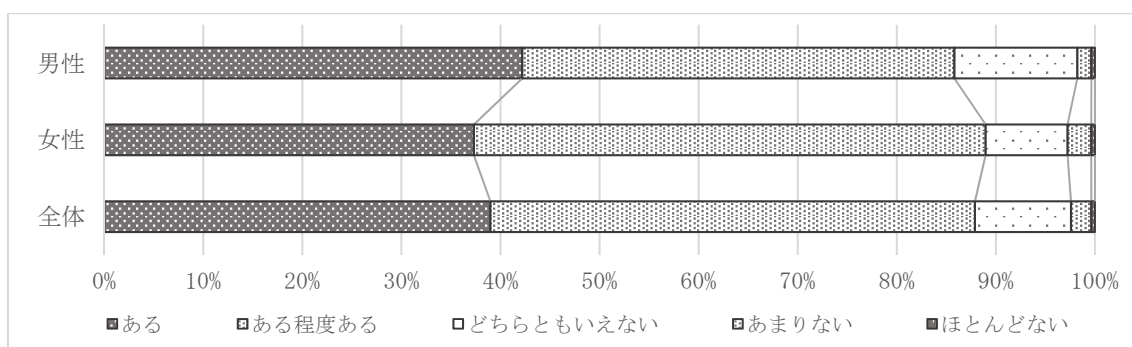
【図 40】 大学生活での勉学についての達成感（性別）



【図 41】 大学での総合的な達成感



【図 42】 大学での総合的な達成感（学科別）



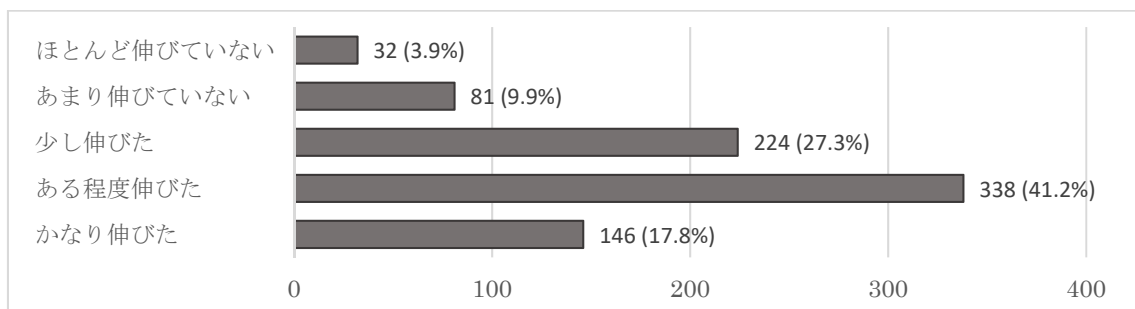
【図 43】 大学での総合的な達成感（性別）

8. 外国語の修得

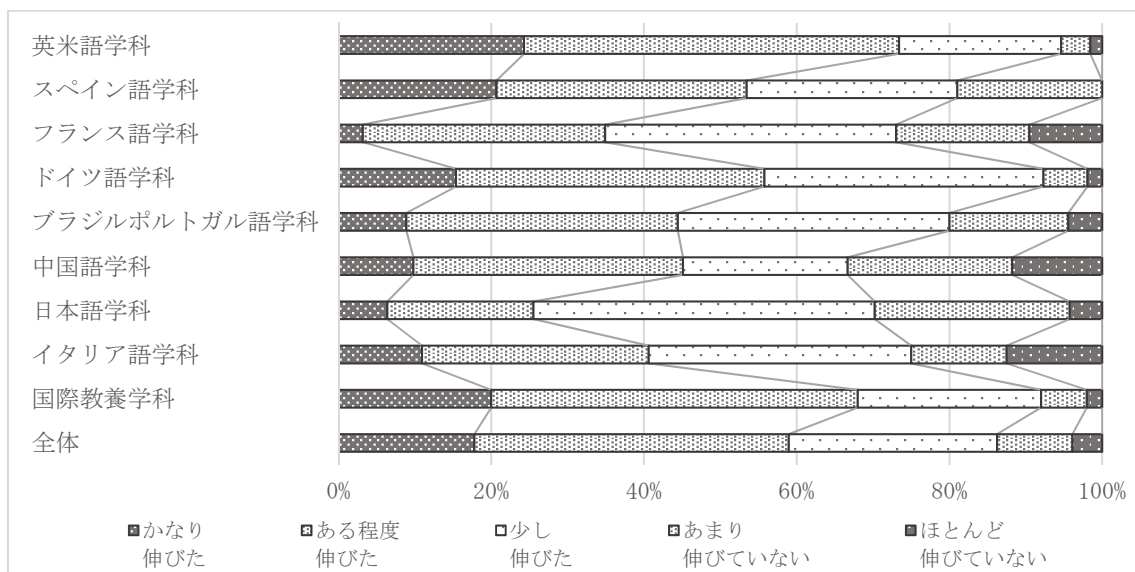
外国語の修得状況として、まず全員に大学に入学してから卒業するまでに英語の力がどれくらい伸びたかをたずねた。多くの人が「ある程度伸びた」と回答するが、「かなり伸びた」という回答も約 18%あり、総じて英語力は伸びたと感じられているようである（図 44）。学科別にみると、やはり英語を中心的に学ぶ英米語学科や国際教養学科で身についたとの回答が多い（図 45）。次

に英米語学科、日本語学科、国際教養学科については英語以外の外国語、その他の言語の学科については専攻する外国語について、身についたかどうかをたずねた（図 46）。これを学科ごとに見ると、英語以外の言語を専攻する学科では、身についたと回答する人の割合が多いことがわかる（図 47）。それぞれの専攻の外国語がある程度身につけていることがうかがえる。

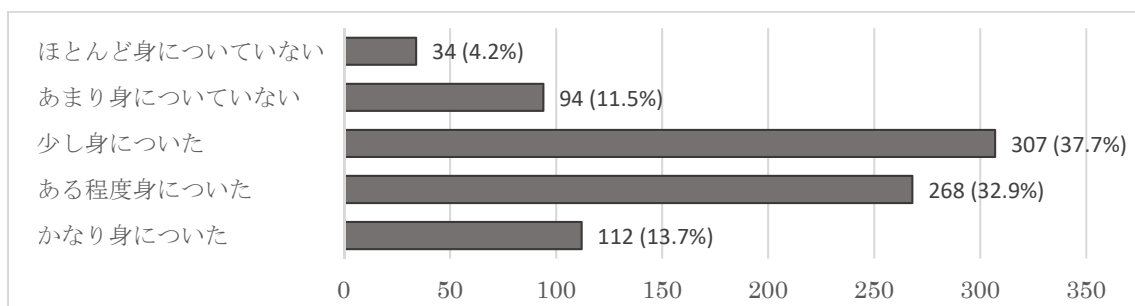
大学で学んだ外国語について、それが社会でどれくらい通用するかをたずねると、「少しは通用する」といったやや消極的な回答が多い（図 48）。この点は、学科別で大きな差はみられない（図 49）。外国語が身についたという実感は学科ごとに異なる傾向があるのに対して、実際に社会で使えるという感覚には大きな差はみられないことから、自分の外国語運用能力に対する自信という点では、ややネガティブな認識をもっているのかもしれない。



【図 44】英語が身についたか

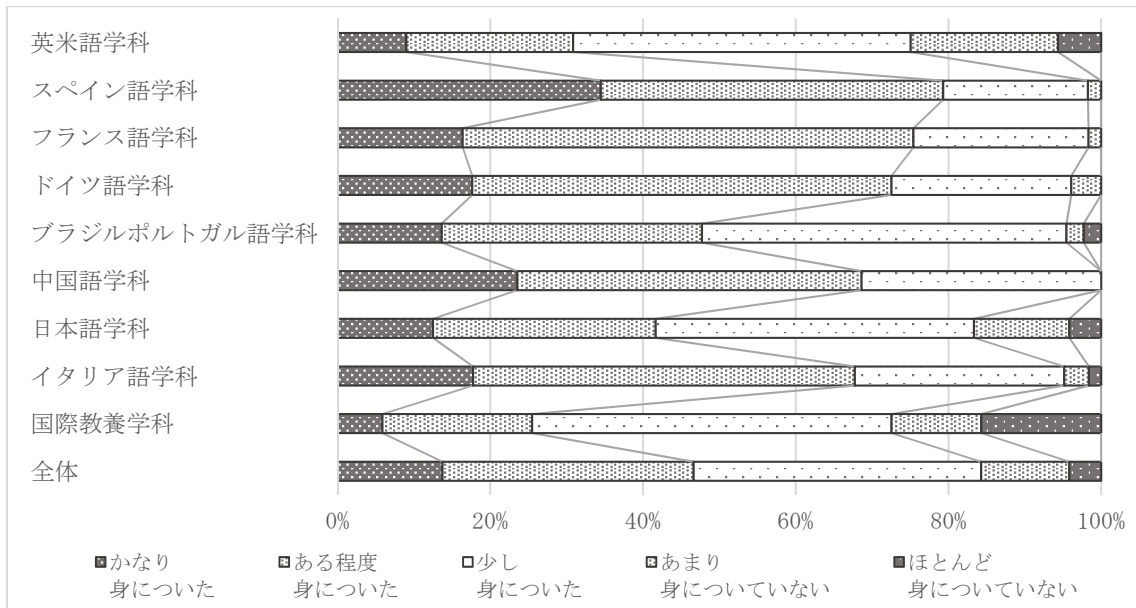


【図 45】英語が身についたか（学科別）

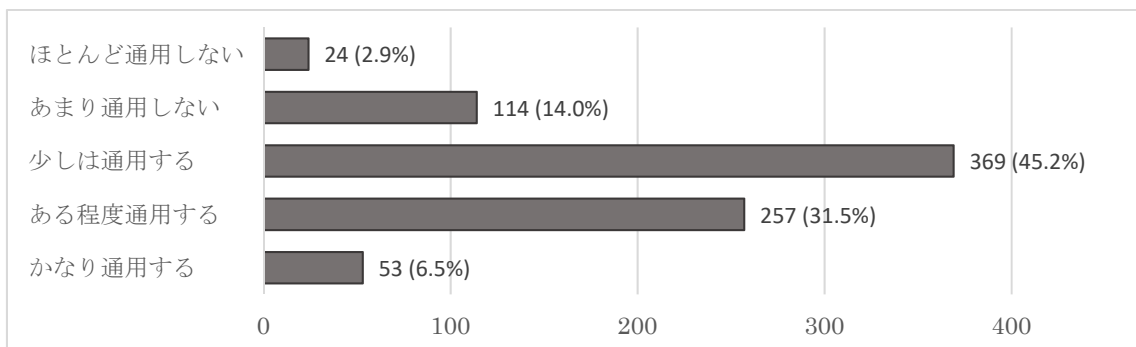


【図 46】英語以外の外国語が身についたか

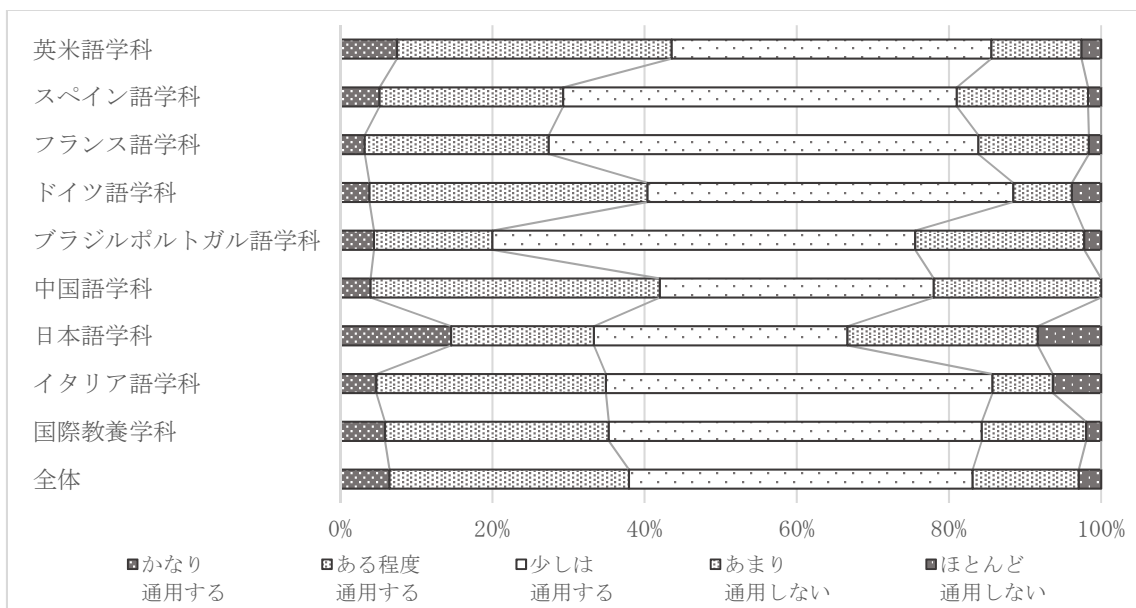
※英米語・日本語・国際教養学科：英語以外の外国語　その他の言語の学科：専攻する外国語



【図 47】 英語以外の外国語が身についたか（学科別）
 ※英米語・日本語・国際教養学科：英語以外の外国語　その他の言語の学科：専攻する外国語



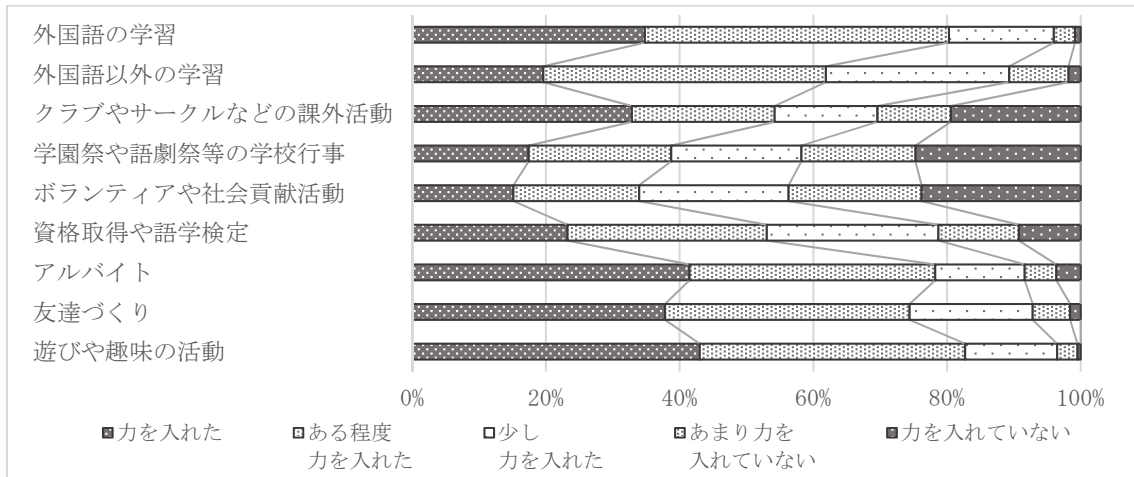
【図 48】 自分の外国語の力は社会でどれくらい通用するか



【図 49】 自分の外国語の力は社会でどれくらい通用するか（学科別）

9. 学生生活で力をいれたこと

在学中に力を入れた取り組みについてたずねたところ、多くの学生が本学の教育の柱である「外国語の学習」に力をいれたと回答している。課外の活動では、「アルバイト」や「友達づくり」への言及が多い(図 50)。学科ごとに力を入れた取り組みをみると、学科間で差がみられるのは「外国語以外の学習」「資格取得や語学検定」「アルバイト」である(表 4)。外国語以外の学習や資格取得・語学検定への取り組みに差がみられるのは、学科としての力の入れ具合が異なる部分が反映されているのだろう(図 51・図 52・図 53)。

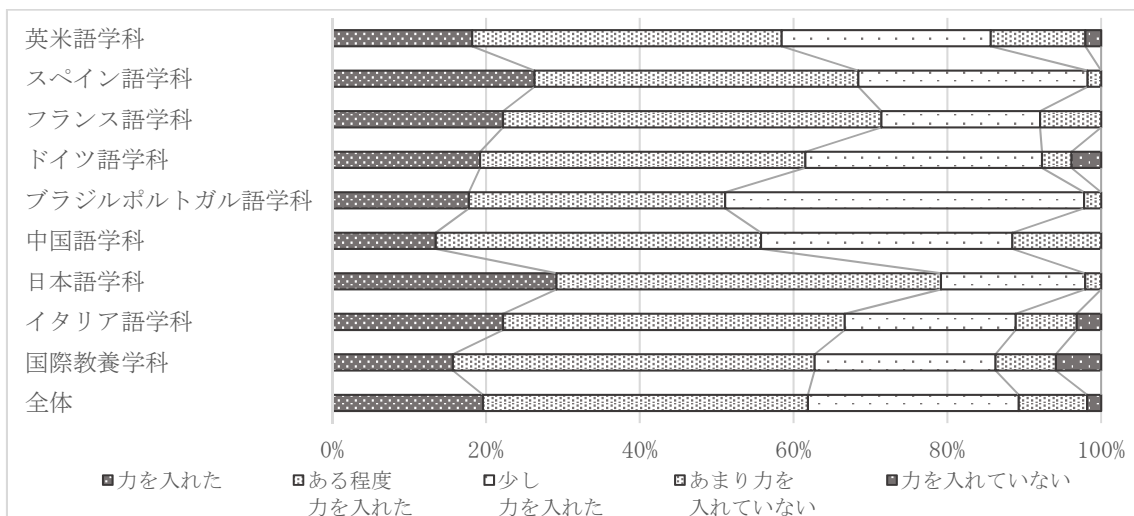


【図 50】大学生生活で力を入れたこと

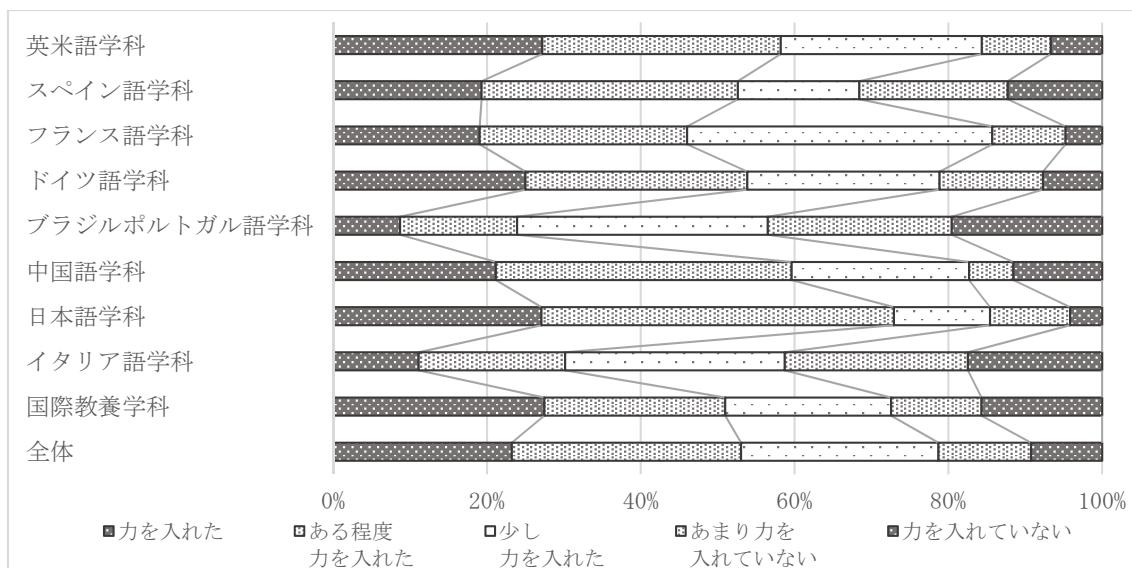
【表 4】学科と力を入れた取り組みの関係

	Cramer's V
外国語の学習	0.100
外国語以外の学習	0.118*
クラブやサークルなどの課外活動	0.101
学園祭や語劇祭等の学校行事	0.093
ボランティアや社会貢献活動	0.113
資格取得や語学検定	0.152***
アルバイト	0.129***
友達づくり	0.098
遊びや趣味の活動	0.109

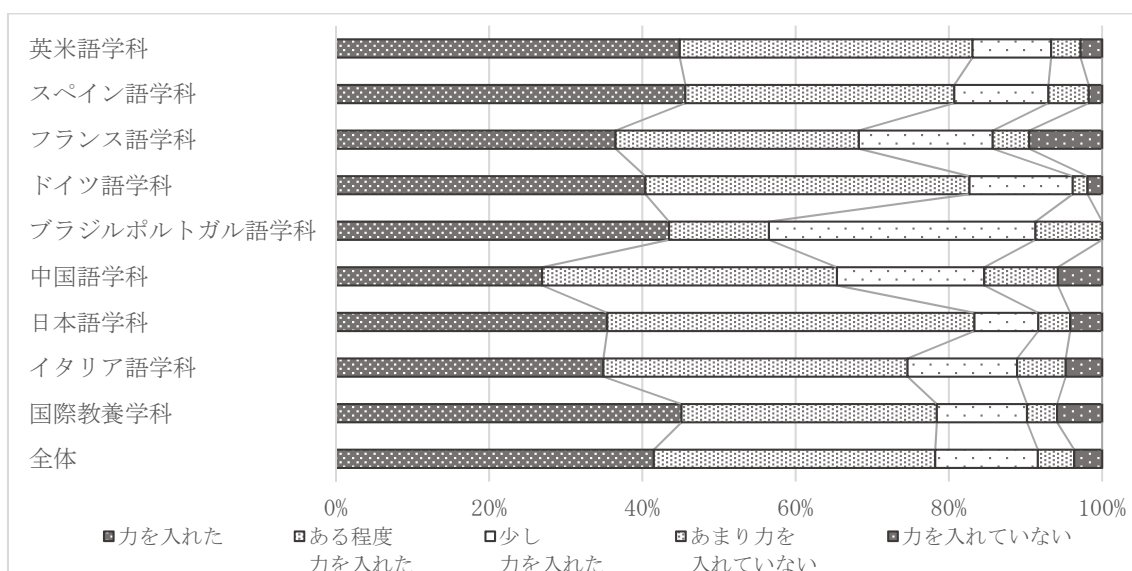
※p<0.01:***, p<0.05:**, p<0.10:*



【図 51】学科別の力を入れた取り組み「外国語以外の学習」



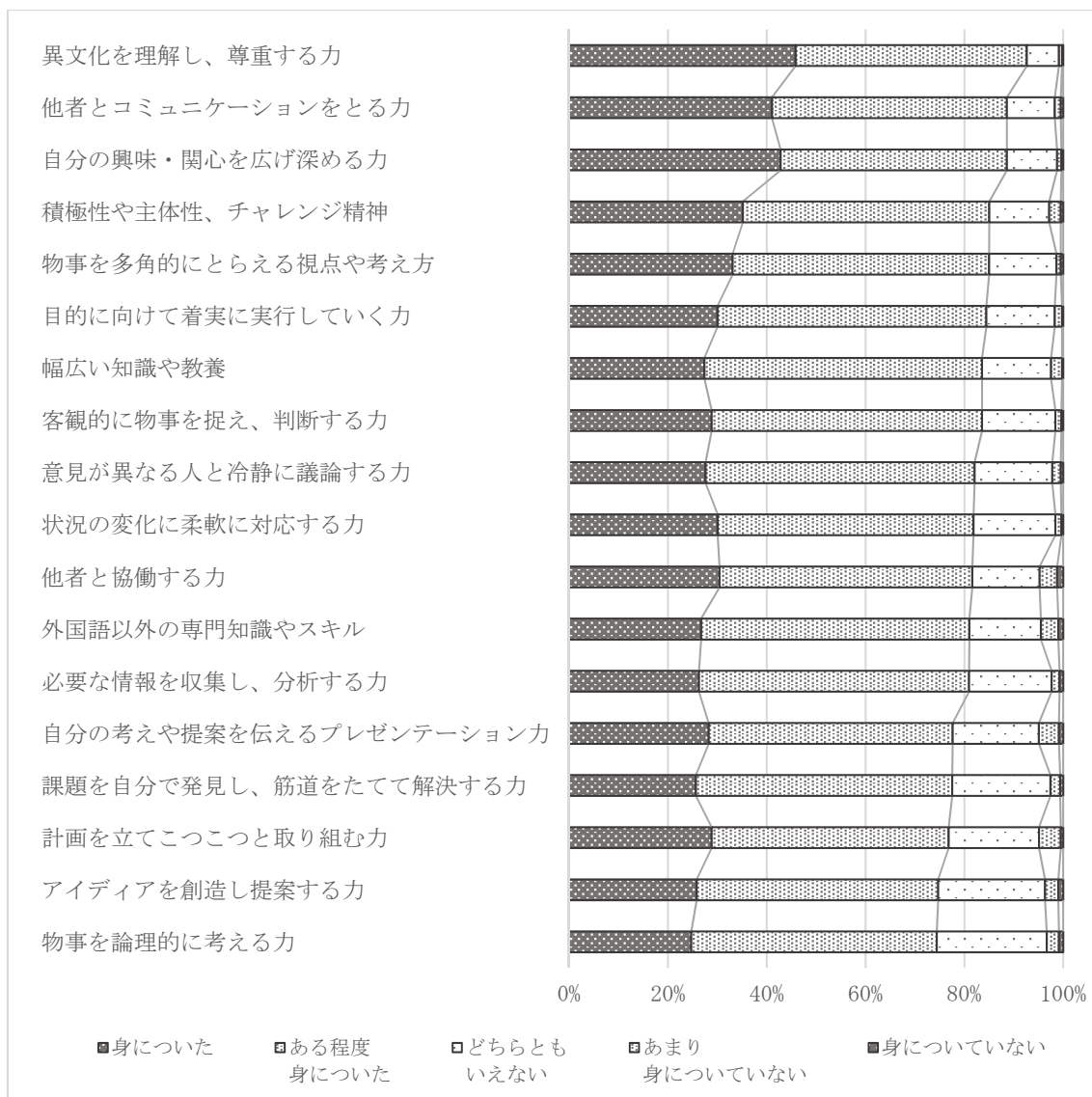
【図 52】 学科別の力を入れた取り組み「資格取得や語学検定」



【図 53】 学科別の力を入れた取り組み「アルバイト」

10. 大学で身についた能力

大学で身についた能力について 18 項目をあげ、それぞれについて身についたかどうか 5 段階で評定してもらった。全体としてみれば、いずれの項目もある程度は身につけていると回答している。そのうえで、身についたとの回答がより多いのが「異文化理解力」や「コミュニケーション能力」などである。これらの能力は、本学の教育理念の柱となるものであり、そのような能力が身についたという実感を多くの学生が持っているようである。他方で、相対的には情報分析や計画性、思考力など、いわば「論理的」な能力が身についたと感じられにくいようである (図 54)。



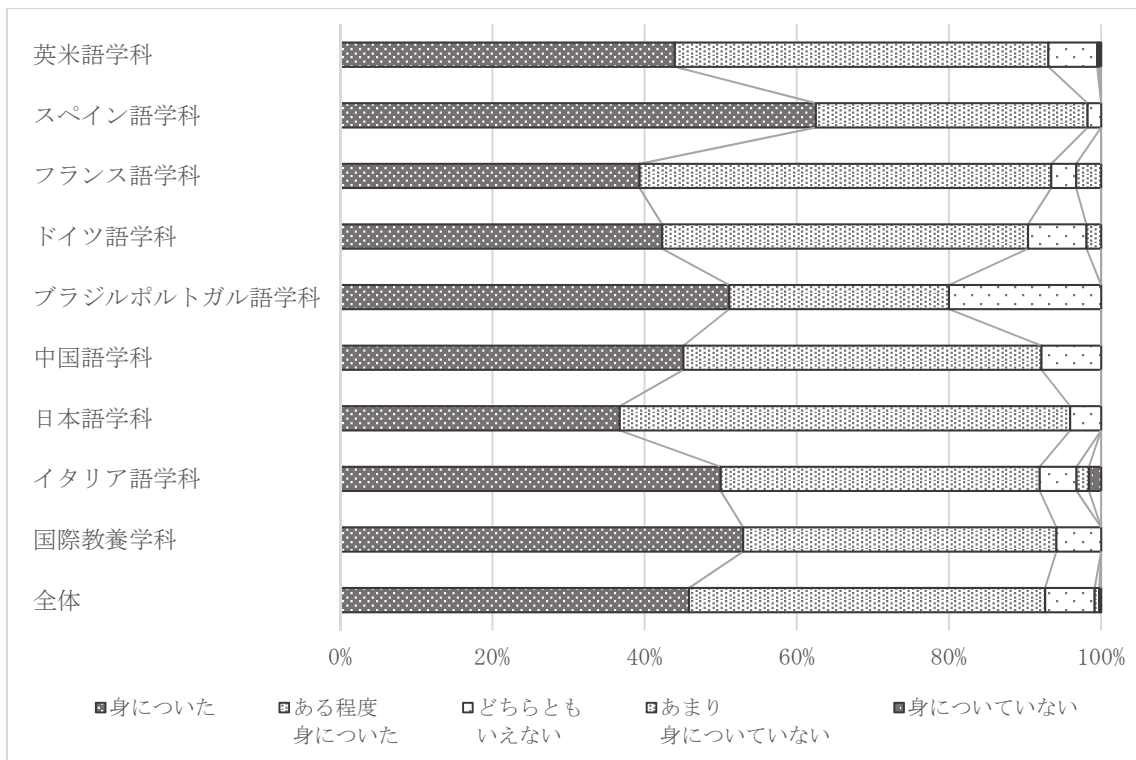
【図 54】 大学生生活で身についたこと

身についた能力を学科間で比較すると、「異文化理解力」「プレゼンテーション力」「客観的な判断力」で有意な差があるようである（表 5）。いずれも顕著な差がみられるわけではないが、学科の教育内容や特徴が、卒業生における身についた能力の実感の違いに反映していると考えられる（図 55・図 56・図 57）。学科の教育の特色を考えるうえでの参考になるだろう。

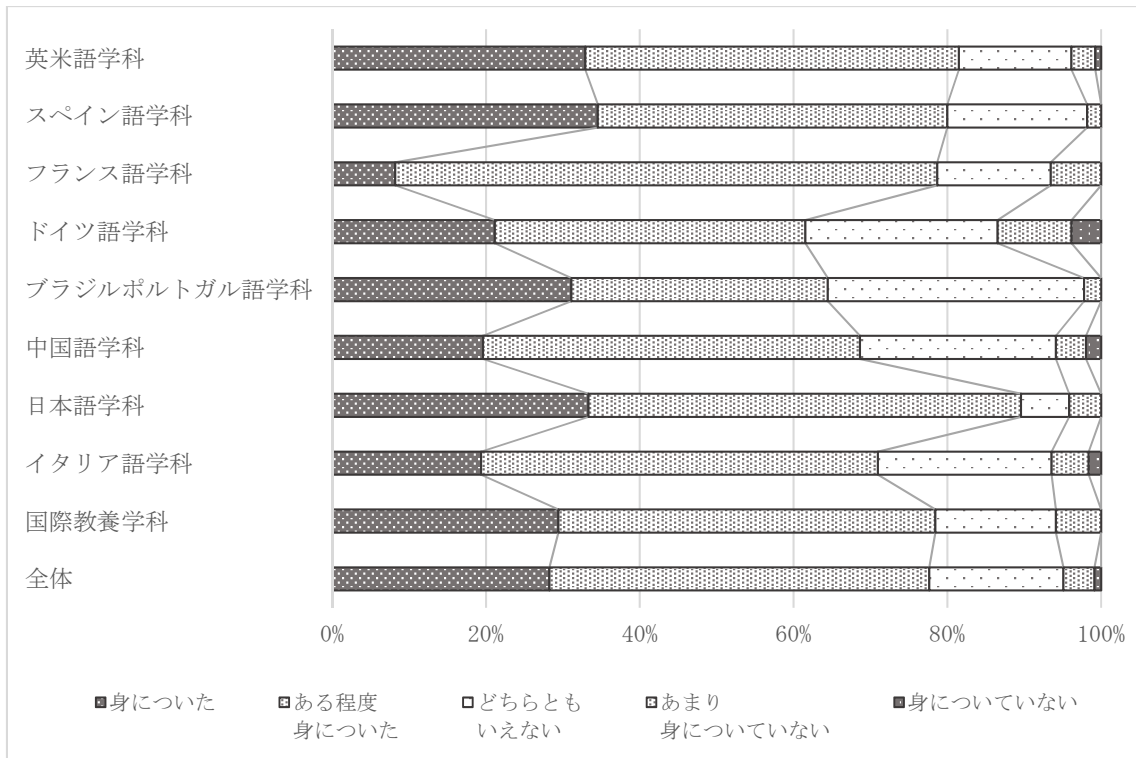
【表 5】 学科と身についた能力との関係

	Cramer's V
外国語以外の専門知識やスキル	0.093
幅広い知識や教養	0.091
他者とコミュニケーションをとる力	0.099
物事を多角的にとらえる視点や考え方	0.108
自分の興味・関心を広げ深める力	0.101
異文化を理解し、尊重する力	0.122**
積極性や主体性、チャレンジ精神	0.100
目的に向けて着実に実行していく力	0.096
物事を論理的に考える力	0.096
自分の考えや提案を伝えるプレゼンテーション力	0.135***
課題を自分で発見し、筋道をたてて解決する力	0.104
客観的に物事を捉え、判断する力	0.115*
アイデアを創造し提案する力	0.098
必要な情報を収集し、分析する力	0.103
状況の変化に柔軟に対応する力	0.085
計画を立てこつこつと取り組む力	0.106
他者と協働する力	0.105
意見が異なる人と冷静に議論する力	0.105

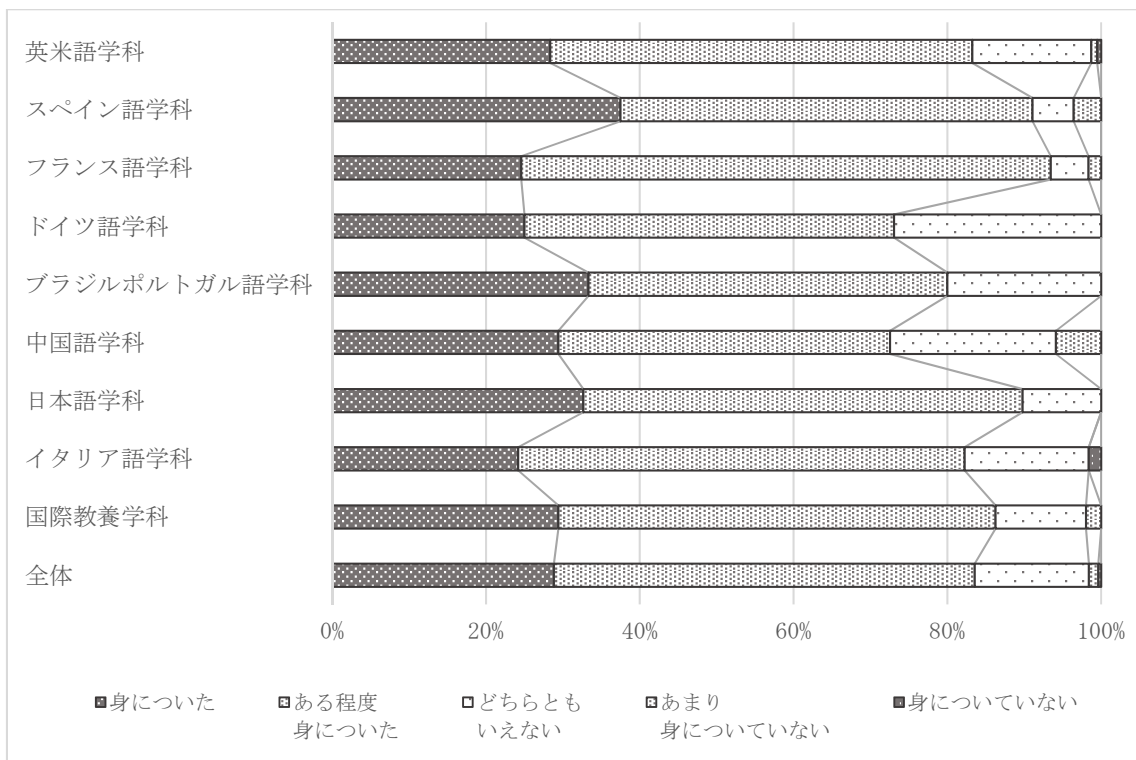
※p<0.01:***, p<0.05:**, p<0.10:*



【図 55】 学科別の身についた力「異文化を理解し尊重する力」



【図 56】 学科別の身について力「自分の考えや提案を他者に伝えるプレゼンテーション力」



【図 57】 学科別の身について力「客観的に物事を捉え、判断する力」